ISSN 0918－1946

調査年報 7

平成6年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調 査 年 報 7

平 成 6 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

目　　次

1　平成６年度調査概要 …… 1

2　調査遺跡 …… 3
　美沢15遺跡 …… 3
　美々４遺跡 …… 7
　美々８遺跡 …… 9
　中野Ｂ遺跡 …… 11
　茂別遺跡 …… 17
　大中山13遺跡 …… 21
　滝里４遺跡 …… 25
　オサツ２遺跡 …… 31
　オサツ14遺跡 …… 36
　高岡１遺跡 …… 39
　キウス５遺跡 …… 45
　キウス７遺跡 …… 50
　ケネフチ８遺跡 …… 53

3　研修・研究会等 …… 55

4　刊行報告書等 …… 57

5　機構・組織 …… 58

凡　例

・「2　調査遺跡」において遺跡名の後に付した括弧内は北海道教育委員会の登載番号である。

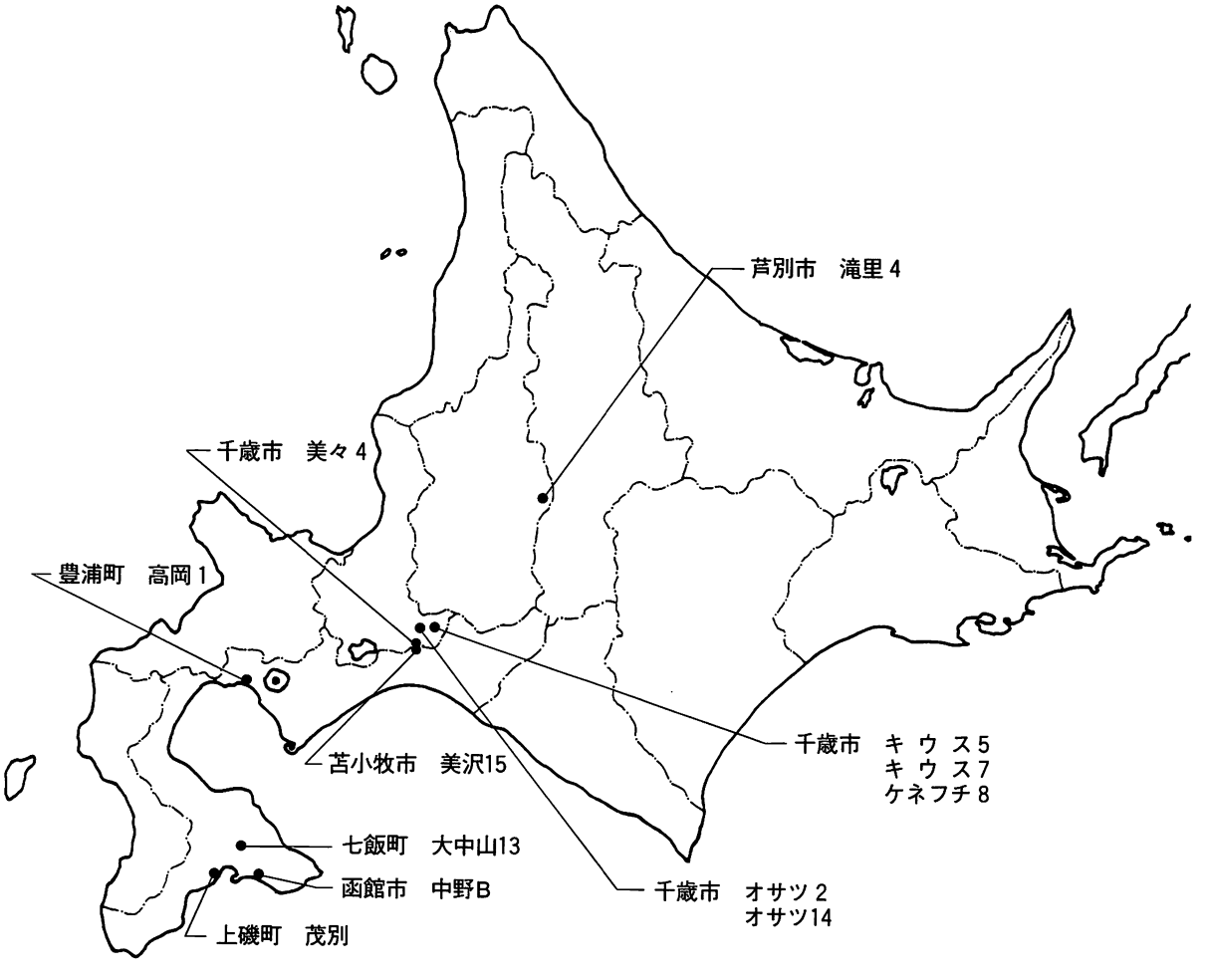
・各遺跡の位置図は国土地理院発行の２万５千分の１もしくは５万分の１地形図または20万分の１地勢図を使用したものである。

1　平成６年度調査概要

今年度の発掘調査は別表のとおり４市３町において８事業に関わる12遺跡について実施され、その面積は63,886㎡である。関連事業はすべて過年度からの継続であり、今年度新たに着手した遺跡は美沢15、滝里４、オサツ14、キウス５、ケネフチ８の５遺跡、完了した遺跡は美沢15、大中山13、オサツ２、オサツ14、ケネフチ８の同じく５遺跡、これらのほかは次年度以降の継続調査となっている。

調査遺跡を主たる時代・時期別に見てみると、旧石器時代の遺跡は無く、縄文時代早期には中野Ｂ・滝里４・高岡１・キウス５、前期にはオサツ14、中期には美沢15・茂別・オサツ14・ケネフチ８・高岡１、後期には美沢15・茂別・大中山13・オサツ14・キウス５・キウス７、晩期には美々４・キウス５・キウス７、続縄文時代には茂別・大中山13、擦文時代から近世にはオサツ２などの遺跡がある。

美々８遺跡については主として低湿部から出土した木製品の実測・写真撮影などの整理作業およびPEG含浸法や真空凍結乾燥法による保存処理をおこなった。



調査遺跡の位置

平成６年度　調査一覧

遺　跡　名	所 在 地	調査面積	関　連　工　事 （ 委 託 者 ）	備　　考
美　沢　15	苫小牧市	3,600㎡	新千歳空港建設 （札幌開発建設部）	新規調査。終了。
美　々　4	千歳市	1,050㎡		昭和51・53・55・58～60年度調査。今年度は上層のみ。
美　々　8	千歳市	——		低湿部（１～４年度調査）の整理作業・保存処理。
中　野　B	函館市	28,400㎡	函館空港拡張整備工事 （函館開発建設部）	４年度から継続調査。
茂　　別	上磯町	374㎡	一般国道228号防災工事 （函館開発建設部）	３年度から継続調査。
大中山13	七飯町	2,385㎡	函館新道〔自動車専用道路〕建設（函館開発建設部）	３年度に一部調査。今年度で終了。
滝　里　4	芦別市	16,575㎡	石狩川水系滝里ダム建設 （石狩川開発建設部）	新規調査。
オサツ２	千歳市	810㎡	道営畑地帯総合土地改良 （石狩支庁）	４年度から継続調査。今年度で終了。
オサツ14	千歳市	1,620㎡		新規調査。終了。
高　岡　1	豊浦町	5,372㎡	北海道縦貫自動車道建設 （日本道路公団）	５年度から継続調査。
キウス５	千歳市	1,270㎡	北海道横断自動車道建設 （日本道路公団）	新規調査。
キウス７	千歳市	1,600㎡		５年度から継続調査。
ケネフチ８	千歳市	830㎡		新規調査。終了。
計　12遺跡	４市３町	63,886㎡	５者８事業	美々８遺跡を除く

2　調査遺跡

美沢(みさわ)15遺跡（Ｊ－02－203）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：苫小牧市美沢185ほか

調査面積：3,600㎡

発掘期間：５月６日～10月29日

調 査 員：佐藤和雄、田口　尚、越田雅司、藤井　浩

遺跡の概要

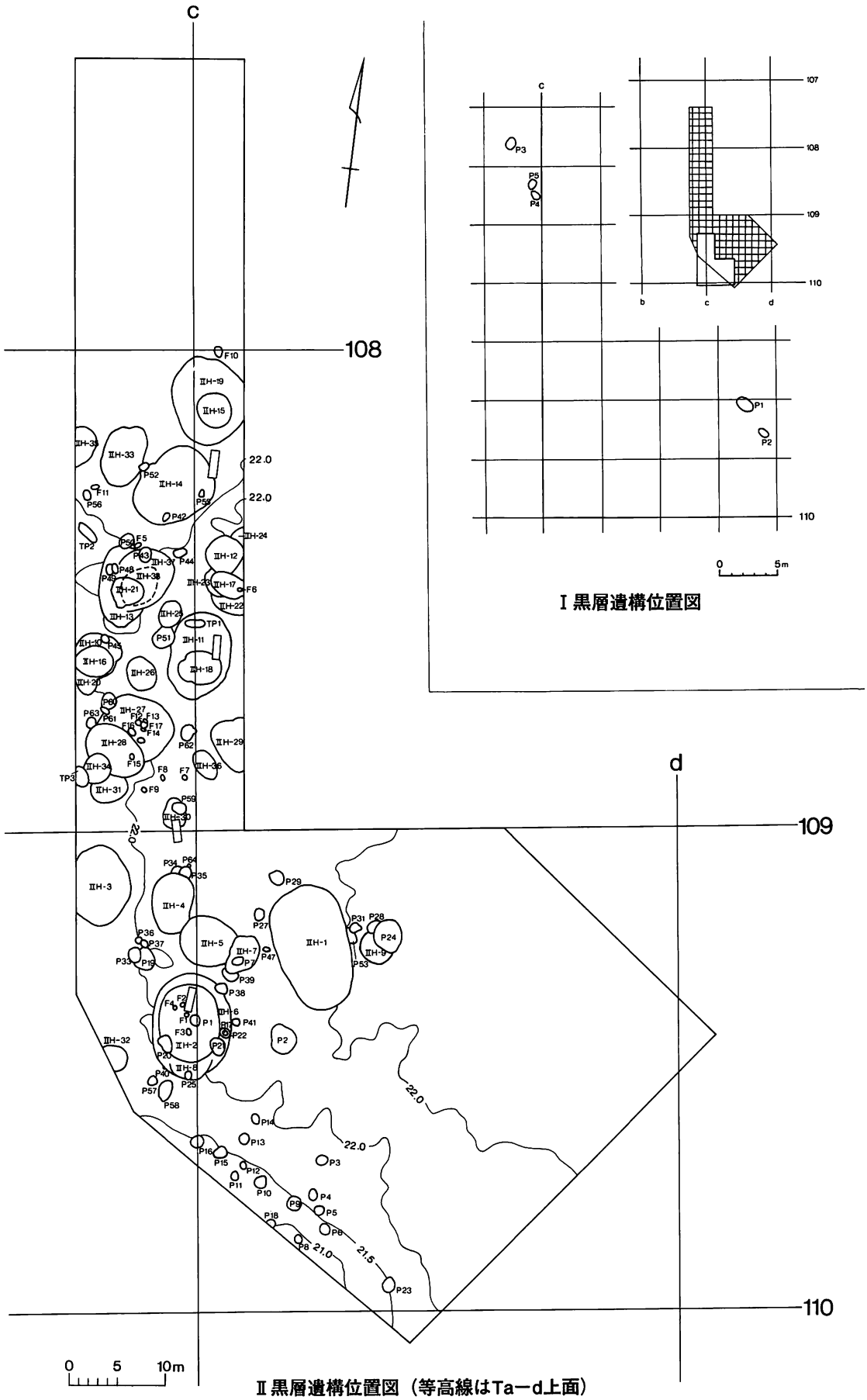
本遺跡は、美々川の支流であるペンケナイ川の左岸、標高約20ｍの台地上に立地している。上流には昭和61・62年度に調査した美沢10・11遺跡がある。遺物包含層はⅠ・Ⅱ黒層で、このうちⅡ黒層を主体に調査した。

Ⅰ黒層からは墓壙２基、性格不明の土壙が４基検出された。いずれも調査区南側の台地平坦部から縁辺部にかけて位置している。アイヌ文化期のものと考えられる墓壙からは刀子１点・礫１点、擦文文化期のものと考えられる墓壙からは刀子１点・擦文土器20点が出土した。遺構外の出土遺物はフレイク・チップ558点、礫・礫片85点である。

Ⅱ黒層からは竪穴住居跡38軒、土壙59基、Ｔピット３基、焼土６ヵ所などの遺構が検出された。遺物は約59,000点出土した。竪穴住居跡は縄文時代中期後半～後期初頭に属し、規模からみると長軸が10ｍをこえる大型のもの、７～８ｍのもの、３～４ｍのものとに分かれる。ⅡＨ－１は長軸約13ｍ、短軸約７ｍの規模を有し、主柱穴と思われる径50㎝～１ｍのピットが８個検出され、長軸上に炉が３基確認された。竪穴内に支笏軽石流堆積物が集中している部分があり、炉の覆土最下層にも認められた。同様の炉をもつ竪穴住居跡はほかに４軒検出された。土壙は14基が縄文時代晩期に属し、調査区南西部の台地縁辺部に位置している。ほかの土壙については、中期末～後期初頭に属すると考えられるが、これらはおもに住居跡周辺に位置している。用途はいずれも不明である。Ｔピットは、２基が小判状を呈するもの、１基が溝状のものである。いずれも杭穴を伴う。縄文時代中期の住居跡と切り合っているものが２基あり、どちらも住居跡より新しい。

出土遺物は土器・石器ともに縄文時代早期～晩期に属し、中期後半～後期初頭の遺物が多い。土器は北筒式が最も多く出土している。

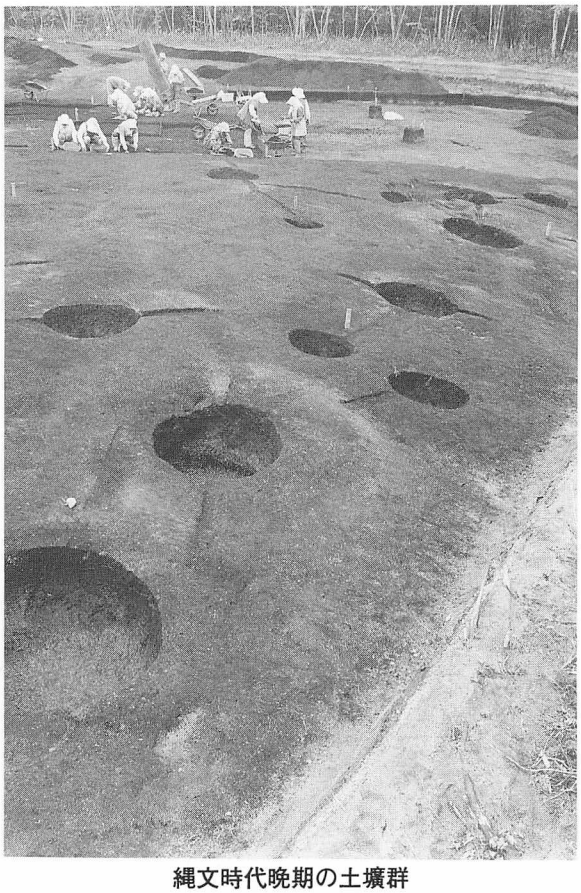
遺跡の位置　１．美沢15遺跡　２．美々４遺跡



Ⅰ黒層遺構位置図

Ⅱ黒層遺構位置図（等高線はTa－d上面）

ＩＰ－１

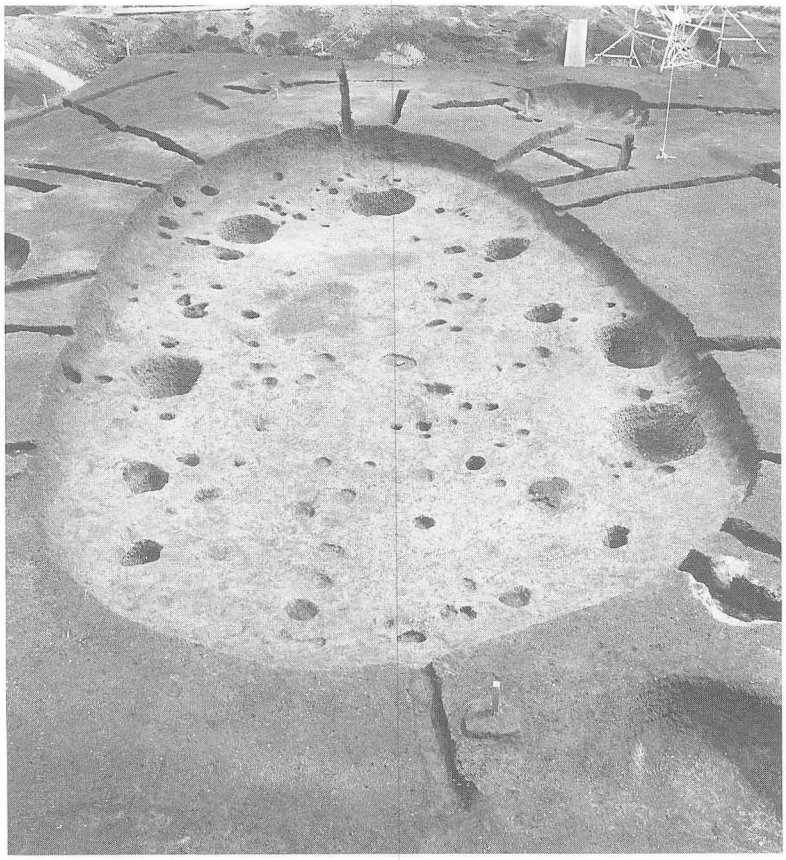


縄文時代晩期の土壙群

ⅡＨ－11・18、TP－１

ⅡＨ－３土器出土状況

ⅡＨ－６土器出土状況



ⅡＨ－１

支笏軽石流堆積物の集中

炉

調査状況

美々4遺跡（A－03－88）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市美々988－13ほか

調査面積：1,050㎡（Ⅰ黒層のみ）

発掘期間：9月12日～10月29日

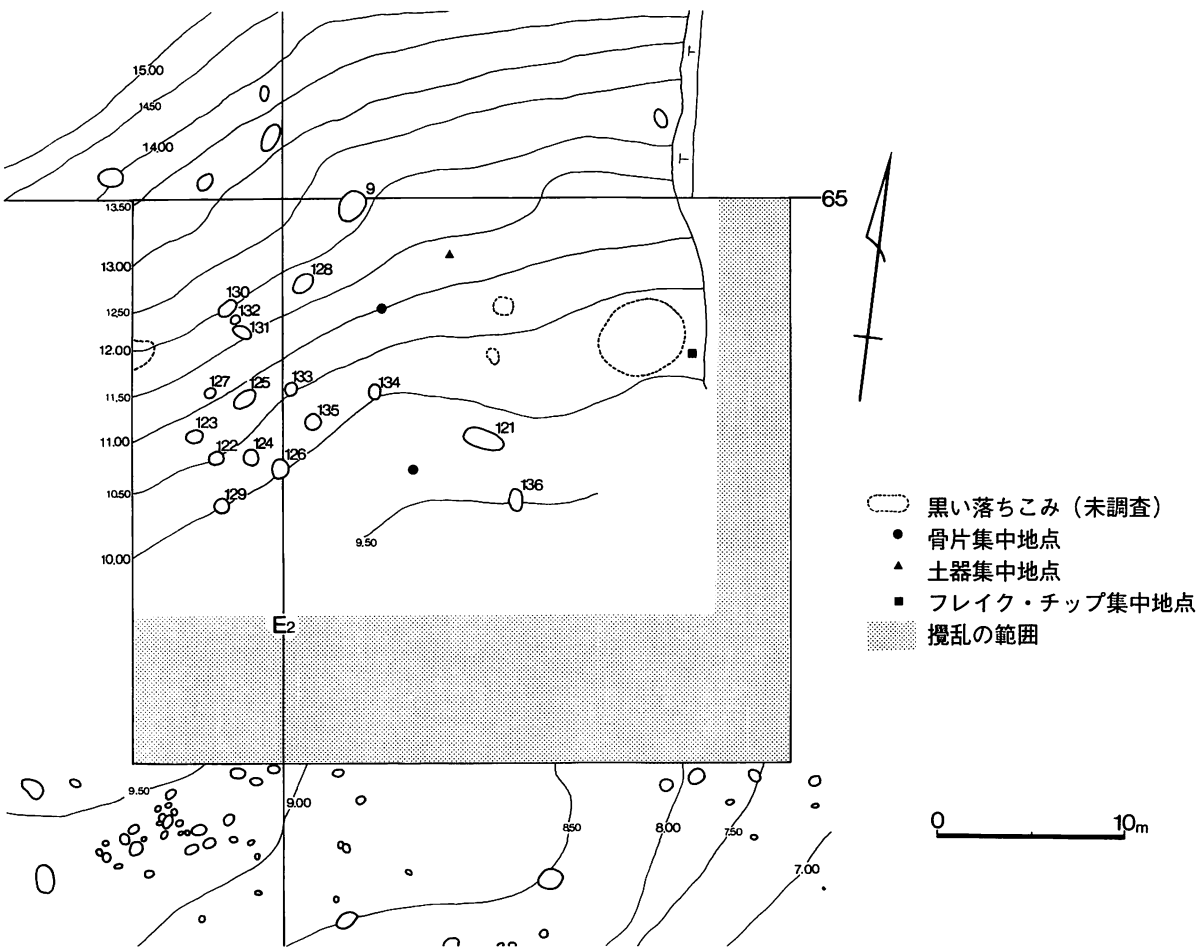
調 査 員：佐藤和雄、田口　尚、越田雅司、藤井　浩

遺跡の概要

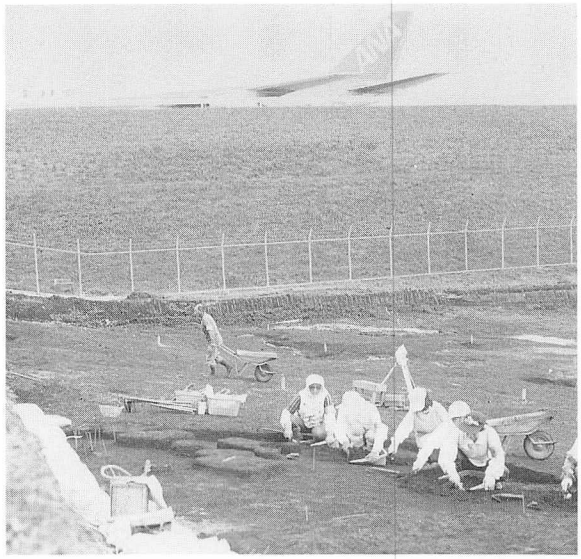
美々4遺跡は美沢川左岸の台地上とそれに続く斜面に立地し、西側の美々3遺跡、東側の美々5遺跡と連続した広範囲な遺跡を形成している。昭和51、53、55、58～60年と調査が行われてきたが、今年度は遺跡中央の南寄りにあたる斜面部のⅠ黒層のみを対象とした。調査区は斜面と南側の平坦面からなるが、この平坦面と東縁は幅数mにわたってⅡ黒層上面に到るまでの攪乱を受けていた。来年度の調査は未調査部分の確認とⅡ黒層を対象として行われる予定である。

遺構と遺物

確認された遺構は土壙墓3基、土壙14基、骨片集中地点2箇所、土器集中地点、フレイク・チップ集中地点各1箇所で、このうち土壙墓は鉄製品の破片を伴うアイヌ文化期の墓（ⅠP－121）、人骨を伴う縄文時代晩期の墓（ⅠP－125・128・130）である。遺物は縄文晩期末の土器を主体に、これに伴って石鏃、スクレイパーなどの石器が出土している。

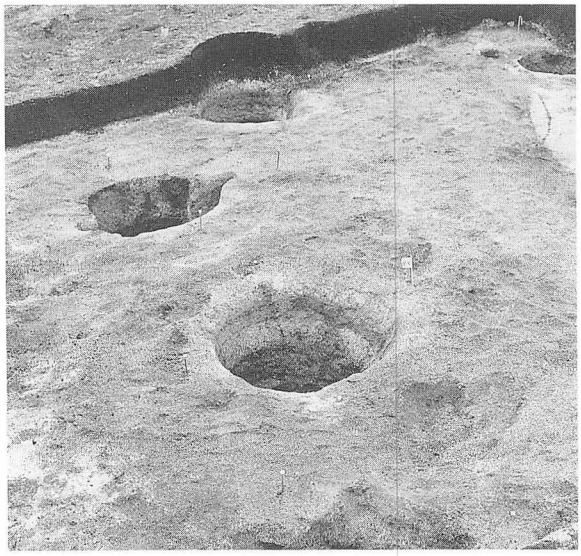


Ⅰ黒層遺構位置図（等高線はTa－c層上面）



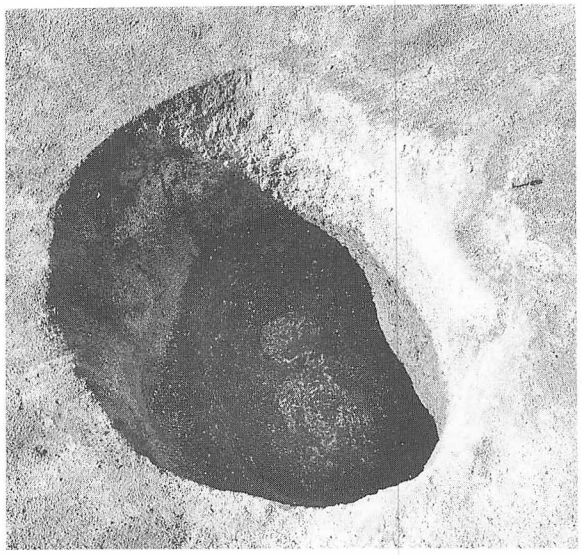
調査状況（斜面部）

調査状況（南側平坦面）

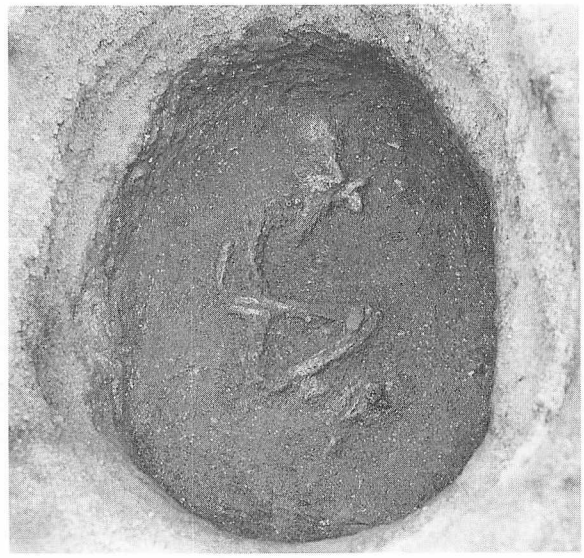


ピット群

ＩＰ−121



ＩＰ−125



ＩＰ−128

美々（びび）8遺跡

整理期間：4月12日～3月24日

調 査 員：田口　尚、越田雅司

整理の概要

本年度は、昨年に引き続き平成4年度に出土した多量の木製品の分類と台帳作成、実測図作成、写真撮影、保存処理・修復・復元作業および水洗選別、浮遊選別を行った。特に選別作業は灰集中、炭化物集中、自然遺物集中等の微細・小型遺物に重点を置いた。

その一例をあげると、灰集中－10からは膨大な量の植物遺存体、動物遺存体、炭化物のほかに鉄鍋片、銭貨、釣針、多量の釘・カスガイ類、銅製飾り金具類、鉛環等の金属製品が灰分布域のほぼ全面から検出され、遺跡全体の分布から見てもこの地点が濃密分布域となることが判明した。他にガラス小玉、彫刻のある骨角器砕片、加工痕のあるシカ角等の獣骨片、サケを主体とする多量の魚骨なども検出されており、今後の同定作業が期待される。また、炭化種子同定の中間データではクルミ属、サクラ属、ホウノキ属、ブドウ属、キハダ属、キイチゴ属、タデ属等の炭化種子のほかコメ、アワ、ヒエ、アサ等の栽培植物も多量に検出されている。この灰集中は、周辺から焼けた炉鈎や切截・破損した木製用具も出土し、『蝦夷生計図説』（秦檍丸　1799）「ムルクタウシウンカモイの図」のような場景の食用植物送り・道具送り・動物送り等を複合したアイヌの灰送り場と考えられる。アイヌ文化期の生業及び「もの送り儀礼」を検討・復元するための貴重な資料となるであろう。

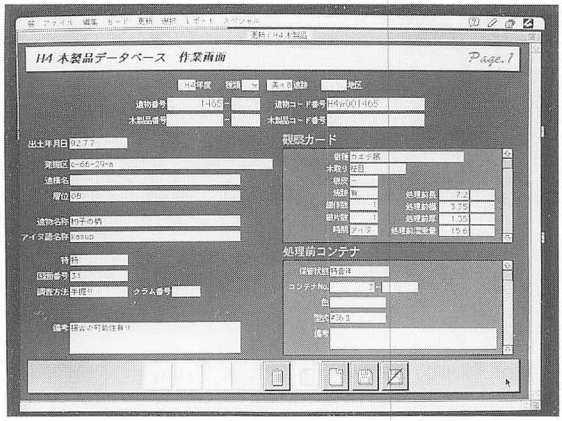
なお、各種同定及び分析のうち、炭化種子同定、動物遺存体同定、金属材質分析、花粉分析、珪藻分析、ガラス材質分析などを現在依頼中である。樹種同定作業については、専門家の指導のもと生物顕微鏡や走査型電子顕微鏡を導入して多量の木製品に対応している。

木製品の保存処理については、PEG含浸槽大型1台、中型2台、小型1台と真空凍結乾燥器1台を導入し、PEG含浸法とマンニトール＋PEG含浸による真空凍結乾燥法を実施している。処理方法はその特性に合わせて選択しており、特に後者の保存処理方法はPEG含浸法よりも強度こそ劣るが大幅な処理時間の短縮を可能にし、小型や彫刻等のある木製品に大きな成果を上げている。

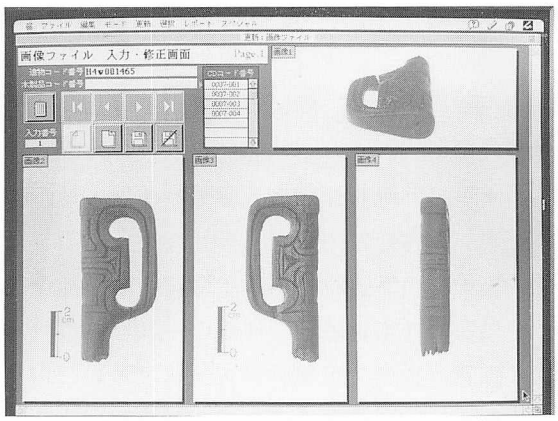
出土遺物の現場記録、観察記録、保管状態、保存処理、写真などは、パソコンを使用した画像付データベースで情報を統合して管理している。遺物の画像は入力作業を効率化するためにフォトCDから取り込んでおり、水漬や保存処理過程の木製品でも検索・比較検討が容易となった。

灰集中－10セクション

炭化種子等の選別（実体顕微鏡）



木製品データベース（テキストデータ画面）



木製品データベース（画像データ画面）

樹種同定（生物顕微鏡）

樹種同定（走査型電子顕微鏡）

保存処理後の復元

大型木製品の実測

中野（なかの）B遺跡（B－01－39）

事 業 名：函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：函館市中野町97－1ほか
調査面積：28,400㎡
発掘期間：5月6日～10月26日
調 査 員：高橋和樹、和泉田毅、佐川俊一、谷島由貴、熊谷仁志、森　秀之、村田　大、
　　倉橋直孝、宗像公司

遺跡の概要

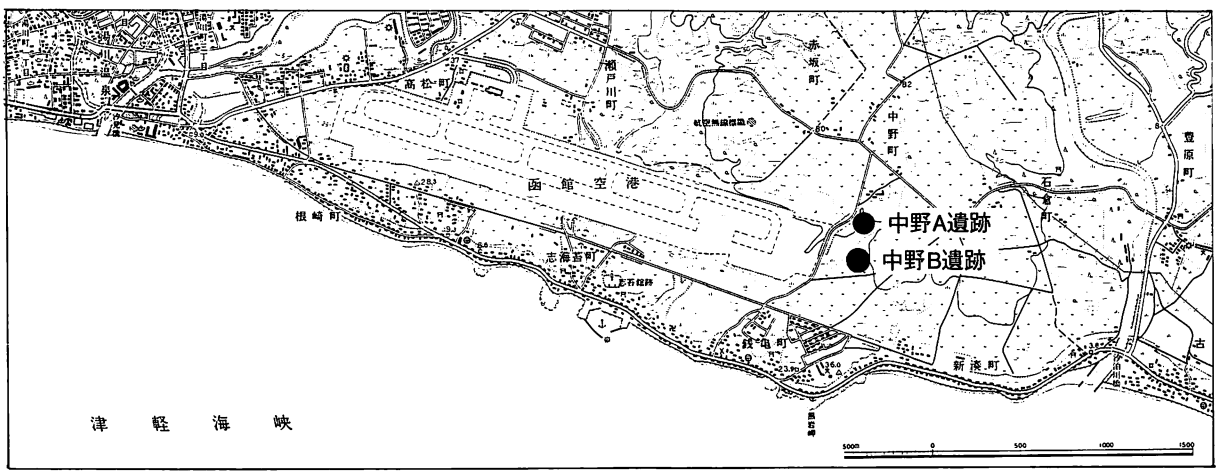
中野B遺跡は函館市街地の東方約8㎞に所在し、函館空港現滑走路の東端部に隣接している。地形的には津軽海峡へ注ぐ小河川、銭亀宮の川の河口から700～800m遡った、標高40～50mほどの左岸段丘上に立地しており、川を挟んだ右岸には中野A遺跡が位置する。空港拡張整備と一体の、市道切替工事に伴う中野A遺跡の発掘調査は、当センターが平成3・4年度に実施し、完了した。

中野B遺跡は、昭和50年度、先の空港拡張工事に際して、函館市教育委員会による進入灯工事区域の発掘調査が実施されて以来、縄文時代早期中葉を代表する集落跡として注目されてきた。今回の拡張整備に伴う中野B遺跡の発掘調査は、当センターが平成4年度から、まず銭亀宮の川の河川切替用地を対象に開始、さらに滑走路本体部へと調査区を拡大しながら、平成5年度、6年度と継続中である。遺構、遺物の大半は、住吉町式土器やムシリⅠ式土器の時期の所産で、累々たる大集落跡の様相が明らかになりつつある。

さて、平成6年度当初の調査予定面積は、遺構確認調査区14,700㎡を含む20,000㎡であったが、途中で、包蔵地外とされていた工事用道路造成地区から、多数のTピットが発見されたため、関係諸機関と協議のうえ、急遽この地区の8,400㎡を追加調査、最終的な調査面積は28,400㎡となった。

平成6年度の調査区は、A～Dの4カ所に分かれる。A区の一部とB・C区の全域が遺構確認調査区であり、D区が工事中発見に伴う追加箇所である。

A区は平成5年度調査区の東側にあたり、調査面積は北東部の遺構確認区2,500㎡を含む7,800㎡である。92軒の竪穴住居跡や73基を数える土・墓壙など、集落跡を構成する遺構の多くは、昨年度の調査区に隣接した南西から南側の部分に見出され、標高がやや低くなる東側へは広がらない。この地区からは条痕文の施された尖底土器が検出されており、大型のフラスコ状ピット群を伴う、該期の集落跡と考えられる。



遺跡の位置

B区は包蔵地内に計画された工事用道路部分で、面積は5,500㎡。幅30mの南北に細長い形の調査区で、ここには18基のTピットが分布していた。

C区は進入灯工事の計画区域で、面積は6,700m。土層の観察などから、縄文時代早期かと思われる5軒の竪穴住居跡と22基の土壙を検出、Tピットも15基発見された。

D区では土壙2基、Tピット54基が見出され、遺構が予想以上に広範囲に残されていることが判明した。

遺構と遺物

平成6年度検出の遺構は、竪穴住居跡97軒、土壙97基（内、フラスコ状ピット17基）、Tピット97基であった。

竪穴住居跡には、長軸8mと大型で深いもの（H－39）もあるが、長軸5m以下の、浅く皿状に掘り込まれた例が多い。平面形は不整円形、楕円形、隅丸長方形などを呈し、重複する例が少なくない。炉跡や灰跡を伴う住居は稀で、柱穴も内部の1～数本の主柱穴と壁沿いにめぐるものとから成るが、整然たる配列が窺われる例は多くない。床面や覆土からの遺物の出土も概して少なめであった。

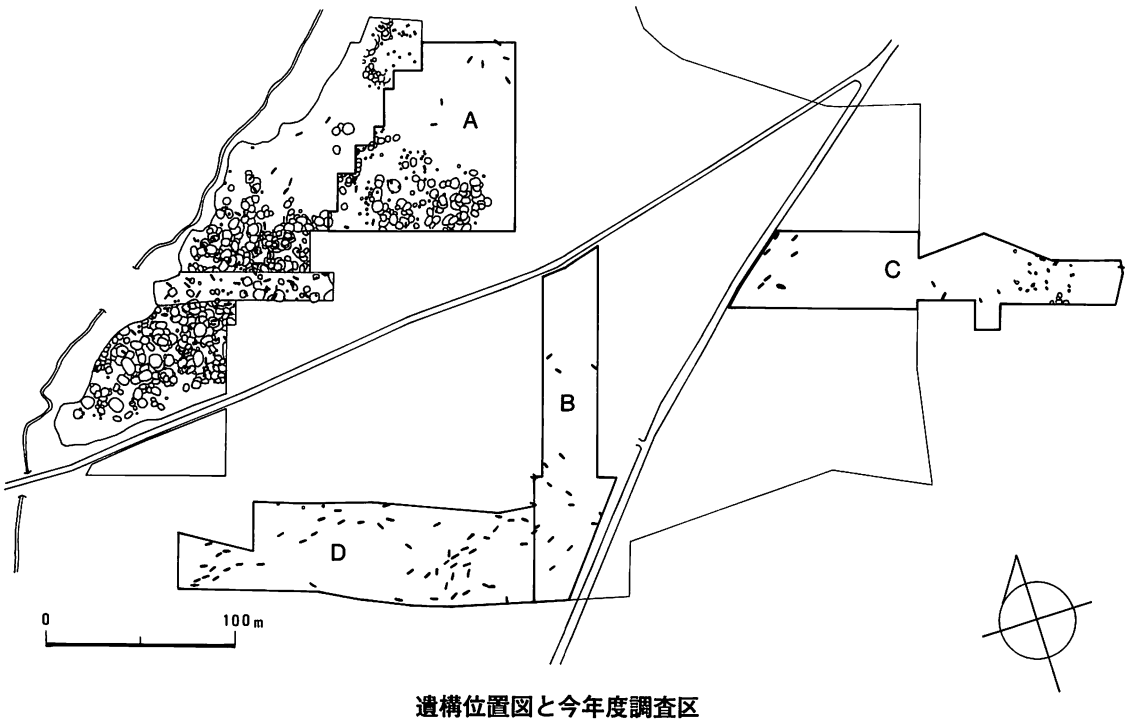
土壙にはフラスコ状ピット、土器1個体を副葬した墓壙と思われるもの（P－98）、石皿・すり石・石錘の集中を伴う浅い不定形の土壙、すり石などの入った柱穴様の小ピットなどがある。フラスコ状ピットは、A区の55ラインを中心に南北方向に17基がまとまっている。壙口の崩壊したものがほとんどで、深さ、底径ともに2m前後の大型のものが特徴的である。類例は函館市根崎遺跡、南茅部町川汲B遺跡にみられる。

Tピットは全部で97基が検出された。D区（54基）がもっとも多く、次いでB区（18基）、C区（15基）、A区（10基）の順である。長軸3～4mの溝状のものが多いが、C区では長軸約1.8mの小さなものが、5個並んで見つかった。

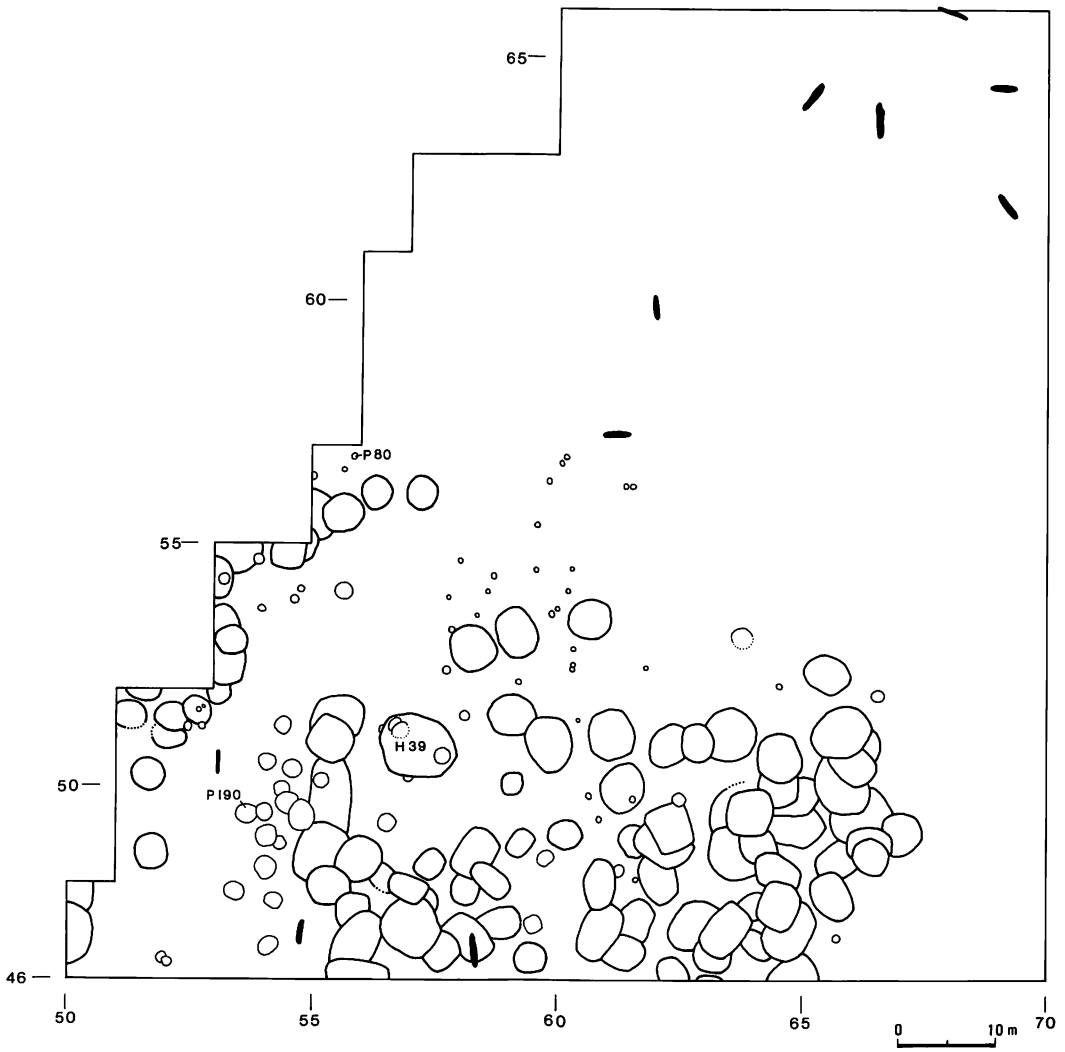
土器は縄文時代早期中葉の貝殻文尖底土器が主体で、貝殻条痕文や押引文の施された、函館市根崎遺跡出土資料に類似するタイプのものが少なくない。このほか物見台式やムシリⅠ式に比定される土器などが少数みられる。石器は中野B遺跡のこれまでの様相と同じく、石錘やすり石、たたき石などの礫石器が多く、とくに石錘の多さが際立つ。剝片石器には石鏃、石槍、石錐、石匙、篦状石器、スクレイパー、両面調整石器などがあり、とくにスクレイパーの出土量が多い。このほか磨製石斧や研磨石材なども得られている。

これまでに中野B遺跡で検出された主な遺構は、下表のとおりである。

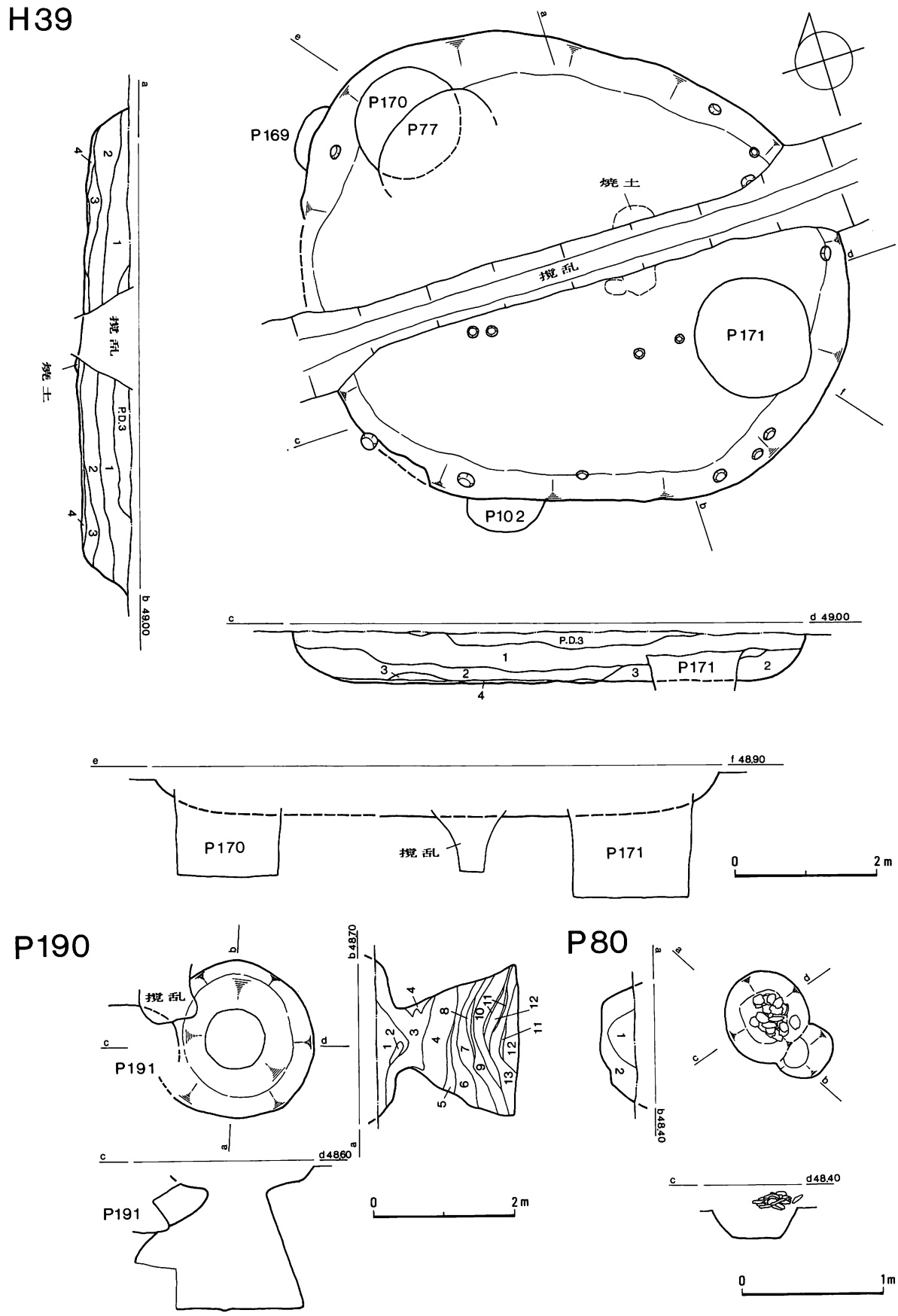
調査年度	調査面積	竪穴住居跡	土・墓壙	焼　土	集　石	Tピット
昭和50年度	1,920	21	15			22
平成4年度	3,550	142	67	4	2	12
平成5年度	11,210	205	90	12	1	29
平成6年度	28,400	97	97			97
計	45,080㎡	465	269	16	3	160



遺構位置図と今年度調査区



A区遺構位置図

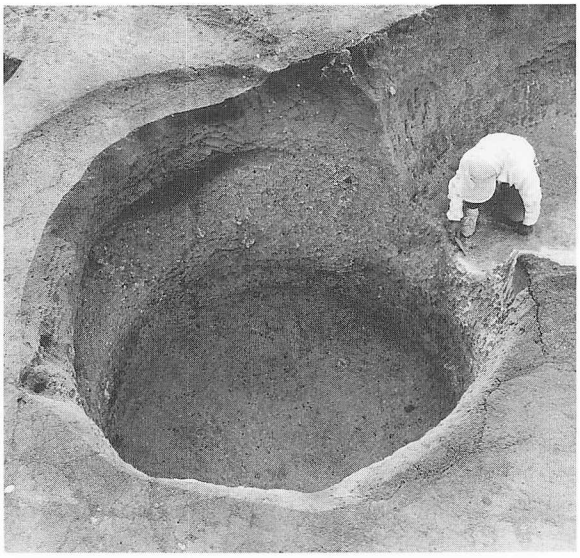

H39
P170
P77
P169
焼土
撹乱
P171
P102
P.D.3
b 49.00
d 49.00
f 48.90
0
2m
P190
撹乱
P191
b 48.70
d 48.60
P80
b 48.40
d 48.40
1m

H—39・P—80・P—190

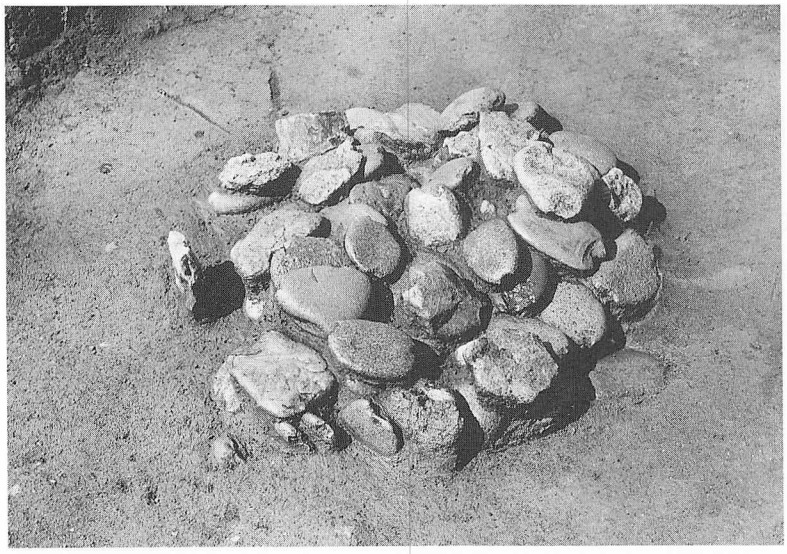
遺構分布状況（空撮）

竪穴住居跡H－39完掘

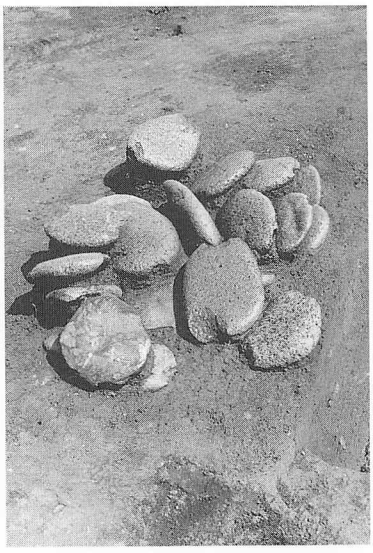
フラスコ状ピットP－190セクション



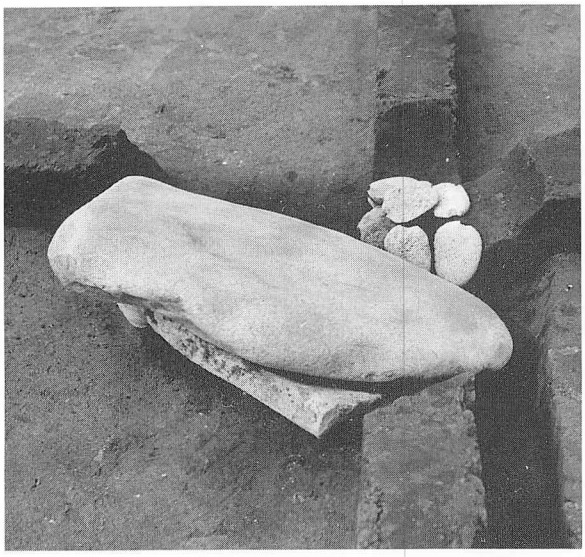
フラスコ状ピットP－168完掘



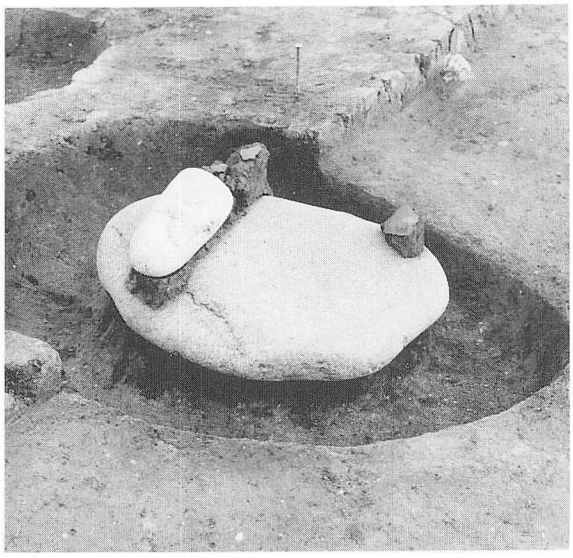
土壙P－195石錘の集中



土壙P－80



土壙P－180遺物出土状況



土壙P－237遺物出土状況

茂別遺跡（Ｂ－06－17）

事 業 名：一般国道228号茂辺地防災工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡上磯町字矢不来96番地

調査面積：374㎡

発掘期間：８月29日～10月31日

調 査 員：越田賢一郎、工藤研治、愛場和人

遺跡の概要

遺跡は茂辺地川河口左岸の段丘上（標高39～40ｍ）にある。平成３年度から調査を行っており、縄文時代の住居跡、土壙墓、土壙、「壕」、続縄文時代の住居跡、土壙墓、土壙、及び近世以降の土壙、溝、建物跡等が検出され、多量の遺物が出土している。土層は上位からⅠ層（腐植土）、Ⅱ層（白頭山－苫小牧火山灰）、Ⅲ層（腐植土）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（黄褐色ローム）に区分され、Ⅲ層上部では続縄文時代、Ⅲ層中・下部及びⅣ層では縄文時代の遺構・遺物が主に検出されている。

今年度はＰラインより山側374㎡を調査した。これまでの調査面積は平成３年度から平成６年度まで合計2,767㎡である。本遺跡の調査は来年度以降も継続される予定である。

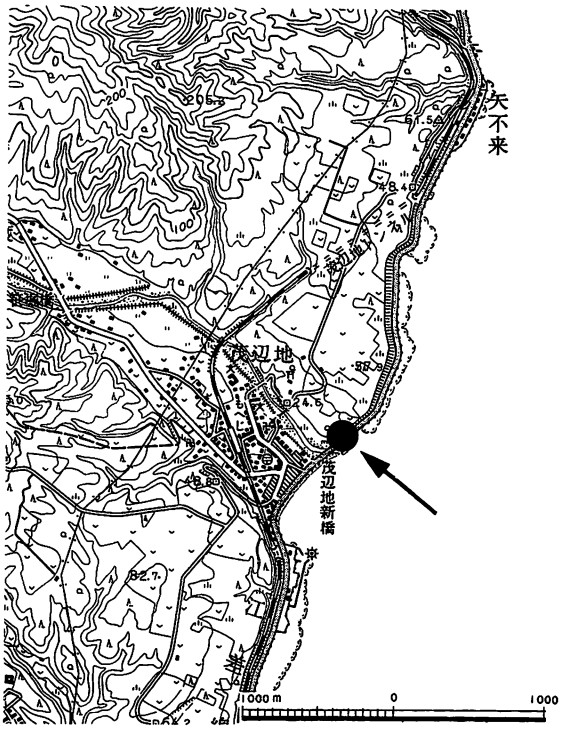
遺構と遺物

今年度の調査区域で検出された遺構は住居跡３軒（Ｈ－９、Ｈ－10、Ｈ－11）、土壙３基、集石１か所、「土器集中」１か所、焼土９か所である。住居跡のうちＨ－９、Ｈ－10は昨年度からの継続調査である。出土遺物は土器約40,000点、石器等約53,000点、計93,000点である。この他に人為的に搬入されたと考えられる礫が約68,000点出土した。

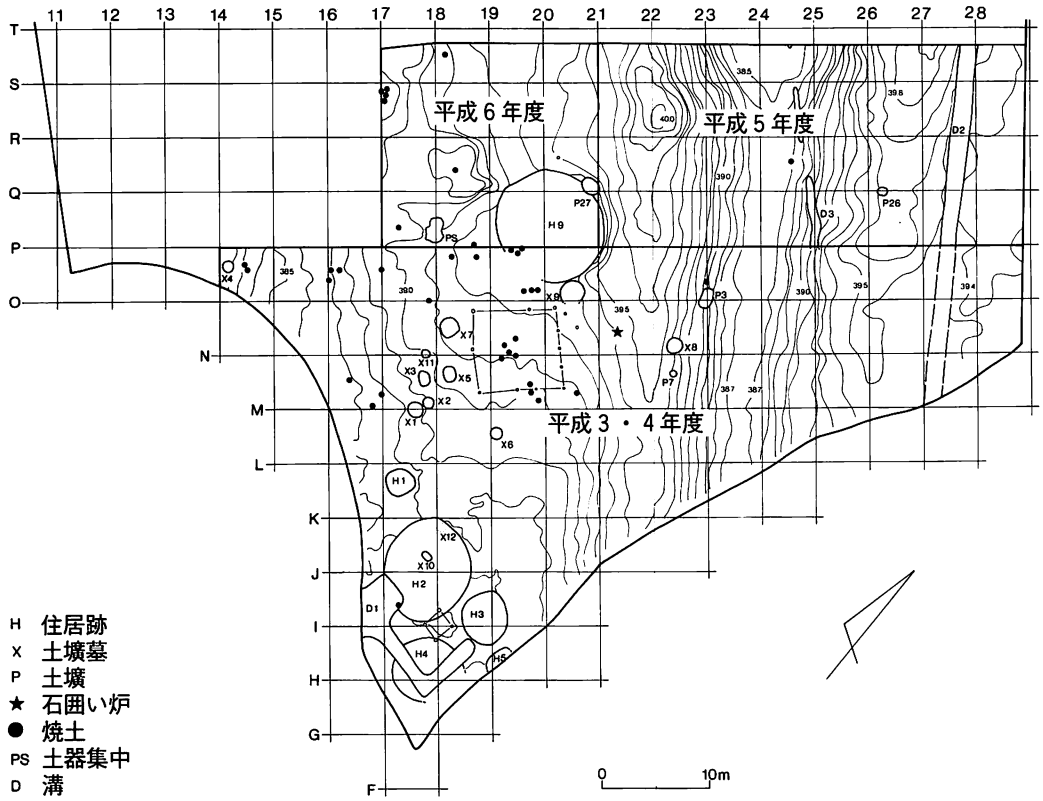
〔Ⅲ層上部〕Ⅲ層上部で検出された遺構は続縄文時代の住居跡１軒（Ｈ－９）、土壙１基、「土器集中」１か所、焼土７か所、近世以降の焼土１か所である。住居跡は直径約10ｍの円形の竪穴であり、床中央には石囲いの炉跡がある。覆土下部では多量の炭化材が検出された。床面では恵山式土器がまとまって出土した。「土器集中」は住居跡の南西側約５ｍの位置にあり、恵山式土器、石器、剝片等が多量に出土した。出土状況から、浅い窪地に廃棄されたものと考えられる。

〔Ⅲ層中・下部〕Ⅲ層中・下部で検出された遺構は縄文時代中期末から後期初頭の頃の住居跡２軒（Ｈ－10、Ｈ－11）、縄文時代の土壙２基、焼土１か所である。Ｈ－10は長径約３ｍの竪穴で、平面形は卵形に近い。床には炉跡がある。廃絶後、「壕」の盛土に覆われ、北西側半分は床上10㎝程のところから盛土が堆積している。盛土下の覆土から余市式土器の大形片が３枚重なった状態で出土した。Ｈ－11は長径約７ｍの長円形の竪穴である。床には石囲いの炉跡がある。覆土下部から余市式土器が多く出土している。

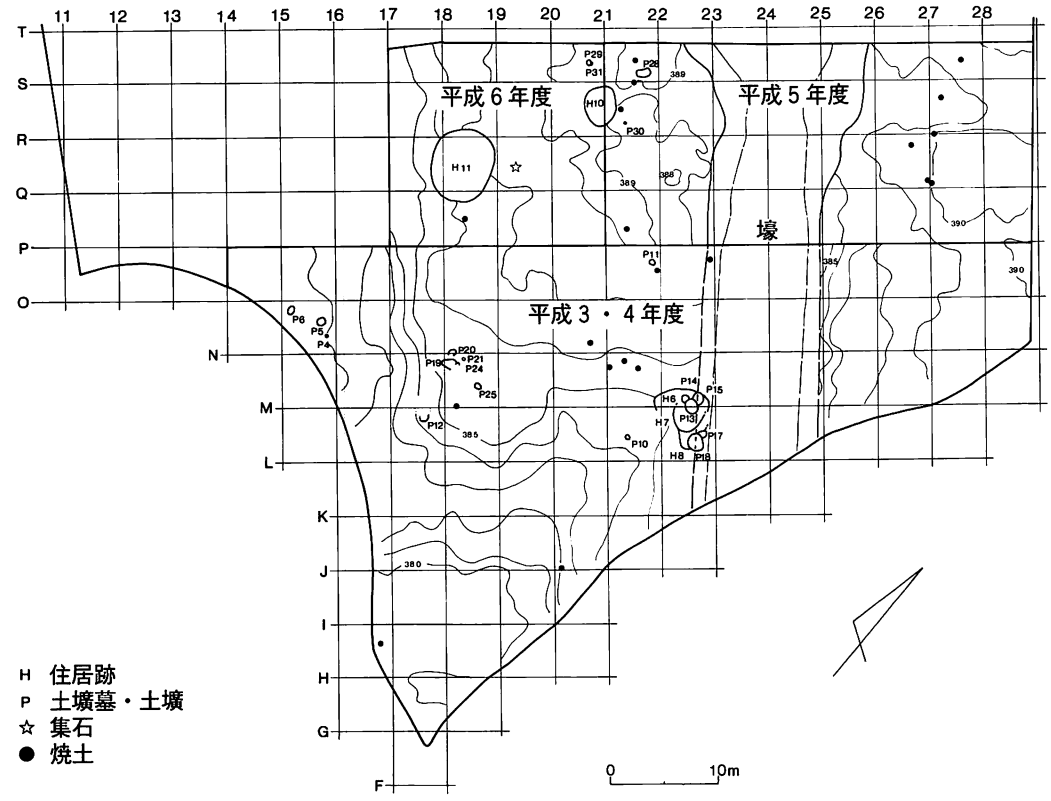
包含層から出土した遺物には縄文時代早期から後期のものがある。土器は余市式が多い。石器では青竜刀形石器が１点出土している。



遺跡の位置



Ⅲ層上部の遺構位置図（等高線はⅢ層上面）

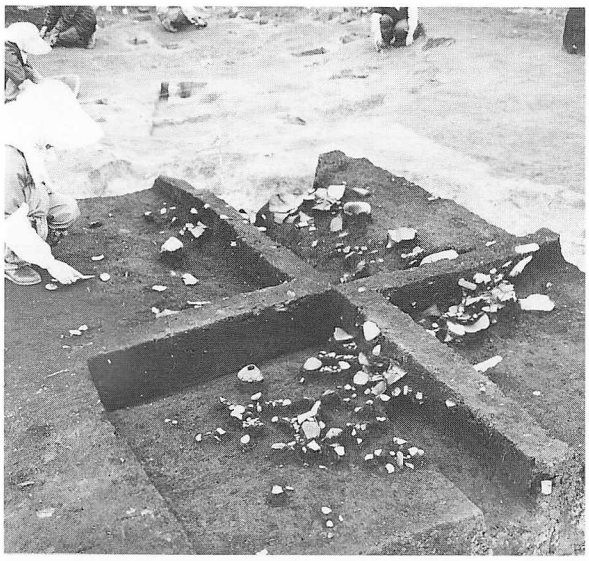


Ⅲ層中・下部の遺構位置図（等高線はⅤ層上面）

調査状況

H ー 9

H－9遺物出土状況



土器集中

魚形石器出土状況

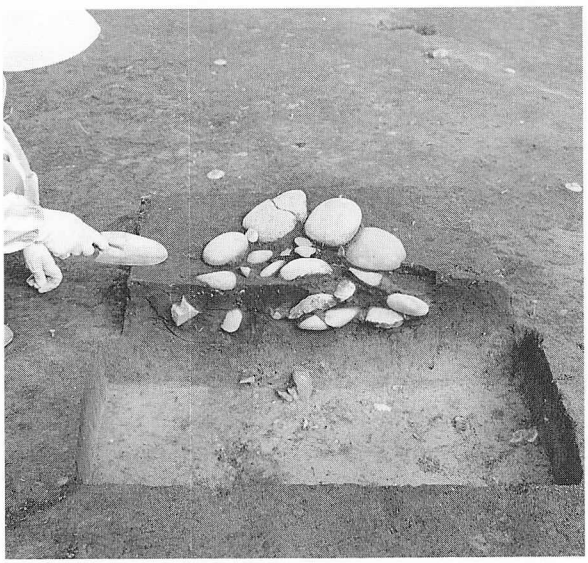
H ー 10

H－10遺物出土状況

H ー 11

H－11炉跡

P ー 29



集　　石

大中山13遺跡（Ｂ－08－24）

事 業 名：一般国道５号函館新道（自動車専用道路）工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：亀田郡七飯町大川403ほか

調査面積：2,385㎡

発掘期間：５月６日～８月27日

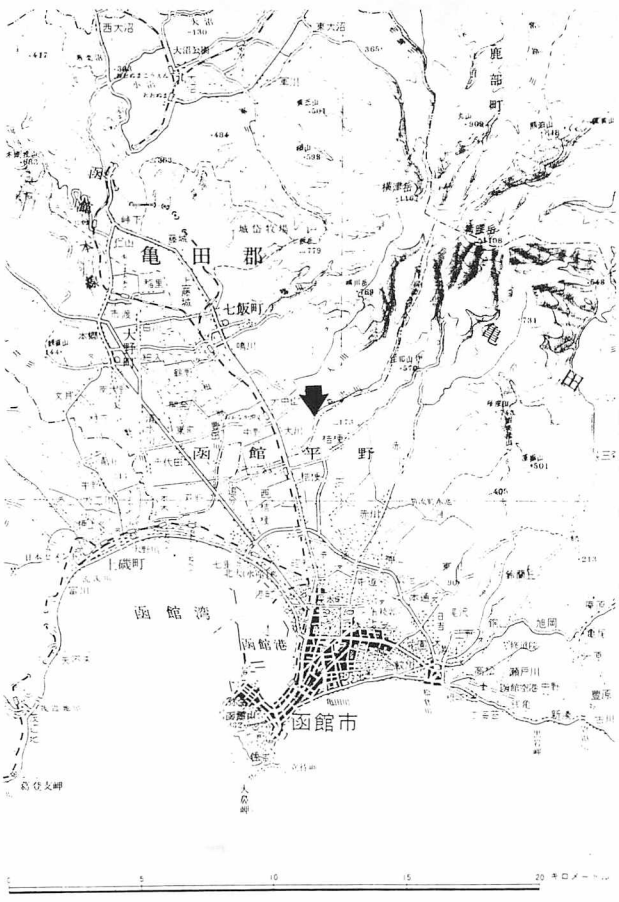
調 査 員：越田賢一郎、工藤研治、愛場和人

遺跡の概要

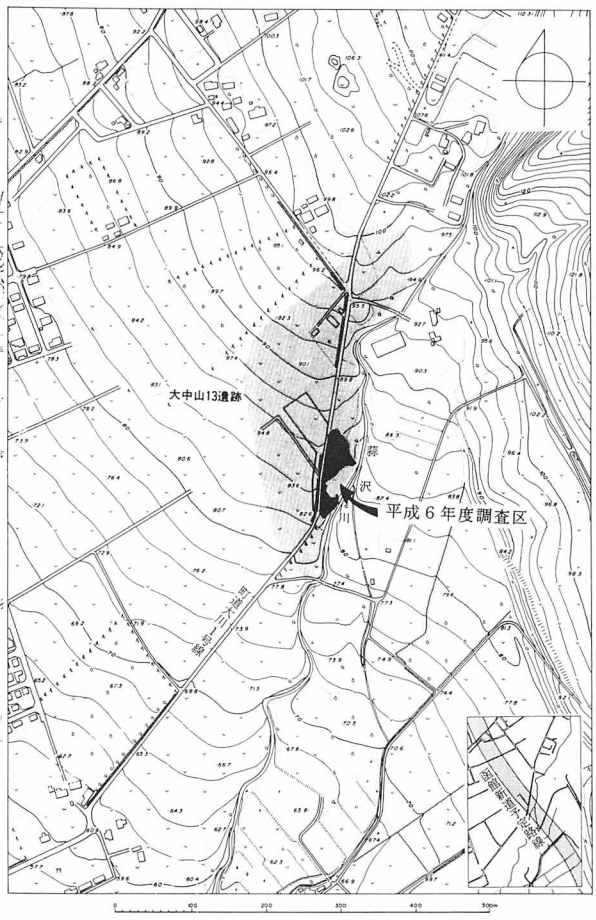
大中山13遺跡は、七飯町と函館市の境界をなす蒜沢川の右岸に位置し、北東の横津山系と南西の大野平野の間に続く扇状地の緩斜面上（標高80～90ｍ）にある。

土層は上位からⅠ層（表土、耕作土）、Ⅱ層（Ko－ｄ、BTm を含む黒色土）、Ⅲ層（腐植土）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（暗黄色ローム層）に区分される。蒜沢川により段丘崖が侵食され、その縁辺に再堆積層が形成されている。Ⅲ層はこの数枚の砂層と砂礫層により大きく３層に区分できる（Ⅲａ、Ⅲｃ、Ⅲｄ）。続縄文、縄文後期、中期末の遺物がⅢａ層から、縄文早期の遺物がⅢｄ層から検出される。

本遺跡は平成３年度にも調査されており、焼土２ヵ所、明治時代の土塁などが検出されている。本年度の調査は町道の下部と蒜沢川側の部分とであり、住居や道路などでかなりの攪乱を受けていた。



遺跡の位置

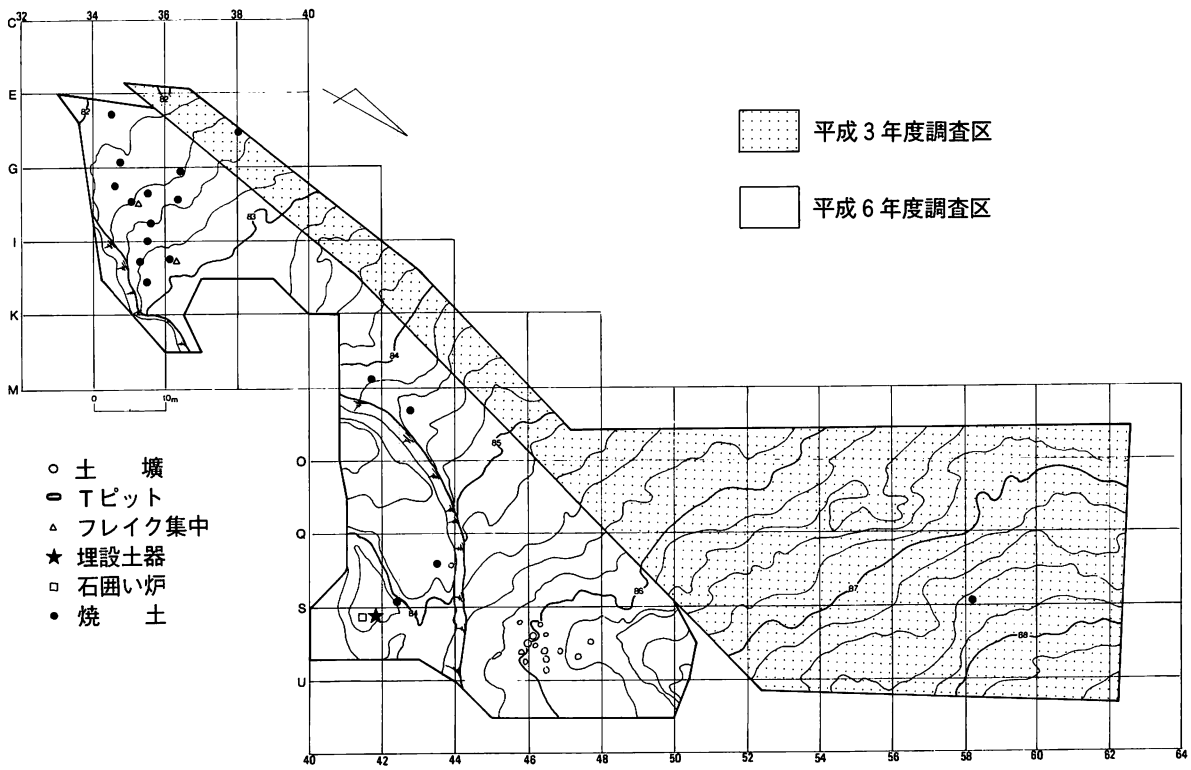


遺跡の範囲と調査区域

遺構と遺物

本年度の調査では、土壙15基、Ｔピット１基、石囲い炉１ヵ所、埋設土器１ヵ所、焼土17ヵ所が検出された。土壙は調査区の北部に集中しており、ほとんどが直径80cm前後の円形のもので、深さは10～40cmである。遺物はまったく出土していない。Ｔピットは土壙群のすぐそば、川沿いの段丘岸縁辺にあり、長径170cm、深さ70cm程の小型のものである。道南では小型なものに含まれる。埋設土器はⅢａ層下位で検出された。埋設されている土器の上部に別の土器の底部があり、蓋のようにかぶせていた可能性がある。土器は縄文後期初頭である。同じ層位のすぐ近くで石囲い炉が検出されている。焼土はほとんどが続縄文時代のもので、調査区の南部に集中していた。

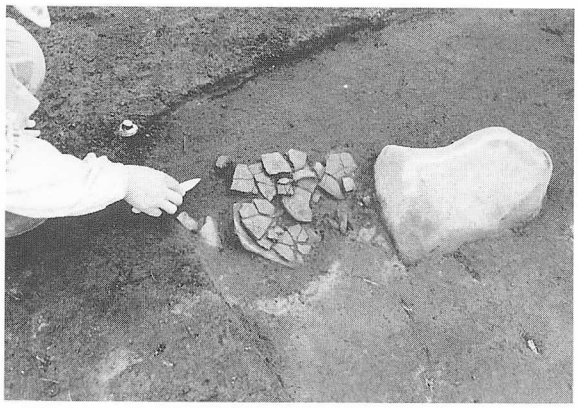
出土遺物は約11,000点で、このうち約6,000点が土器片である。土器の主体は続縄文と縄文後期初頭で、他に円筒上層式および同下層式、東釧路Ⅳ式などがある。続縄文は恵山式が主であるが、同層位で後北式１個体分が検出されている。石器には石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、石斧、たたき石、台石、石皿などがあり、特にスクレイパー類が多い。石材は、ほとんどが頁岩もしくはめのう質頁岩で、黒曜石は石鏃４点と剝片を含めても10点に満たない。



調査後の地形と遺構位置図

調査状況

段丘部の土層断面

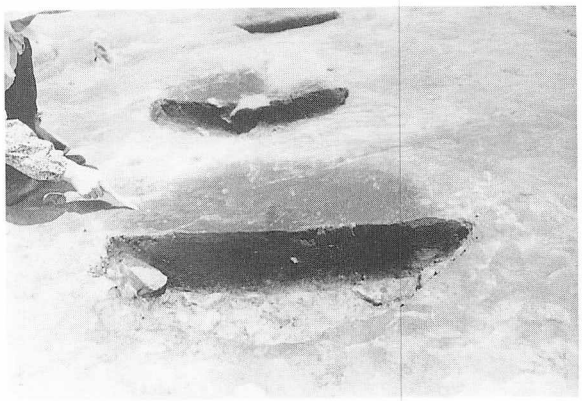


遺物出土状況

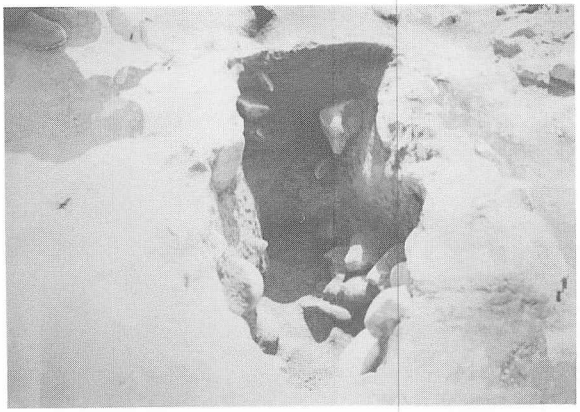
石囲い炉

埋設土器

土　壙　群



P－8土層断面



Tピット土層断面

Tピット

滝里4遺跡（Ｅ－04－６）

事 業 名：石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

所 在 地：芦別市滝里町337－１ほか

調査面積：16,575㎡

発掘期間：５月６日～10月28日

調 査 員：遠藤香澄、田中哲郎、澤田　健

遺跡の概要

本遺跡を含む滝里遺跡群の調査は、芦別市東部で工事中の滝里ダム建設に伴うものである。調査は平成元年度から継続され、昨年度までに９遺跡について発掘が完了している。

今年度調査を実施した滝里４遺跡は、空知川右岸の標高135～140ｍの段丘上に立地し、国道38号を挟んで両側に広がっている。東側の段丘面が一段高く、西側の低い段丘面との間は沢になっている。

高い段丘面は包含層が削平されていり、遺物の残存状態は良好ではなかったが、縄文時代早期中葉の住居跡が検出された。この周辺は調査予定範囲外に包含層が広がっていたため、1,525㎡について追加調査を行った。西側の低い段丘面（南半部）と沢の部分一帯の現地表面下１ｍ程の黒色腐植土層から、早期の条痕文系土器が出土することがわかった。遺物の残存状態は良好である。当初予想していない深い地点からの出土であったため、全体の調査を完了できず来年度以降に調査を継続することとした。以上のような経緯から、今年度は16,575㎡について終了した。

遺構と遺物

本年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡６軒、土壙３基、Ｔピット２基である。

住居跡は一段高い段丘面から検出された。縄文時代早期中葉の沈線文・条痕文系土器の時期で、いずれも径が５～６ｍほどでほぼ円形である。Ｈ－１からは蛇紋岩製の石斧、擦り切り残片、研磨石材、剝片が多数出土した。隣接するＨ－６も遺物点数は少ないが同様の石器組成がみられた。Ｈ－２～５は蛇紋岩製の石器はごく少量で、Ｈ－２・４からは黒曜石のフレイクが多量に出土している。またＨ－４の覆土から径10㎝程の円盤状土製品が、一個体分の土器と共に出土した。

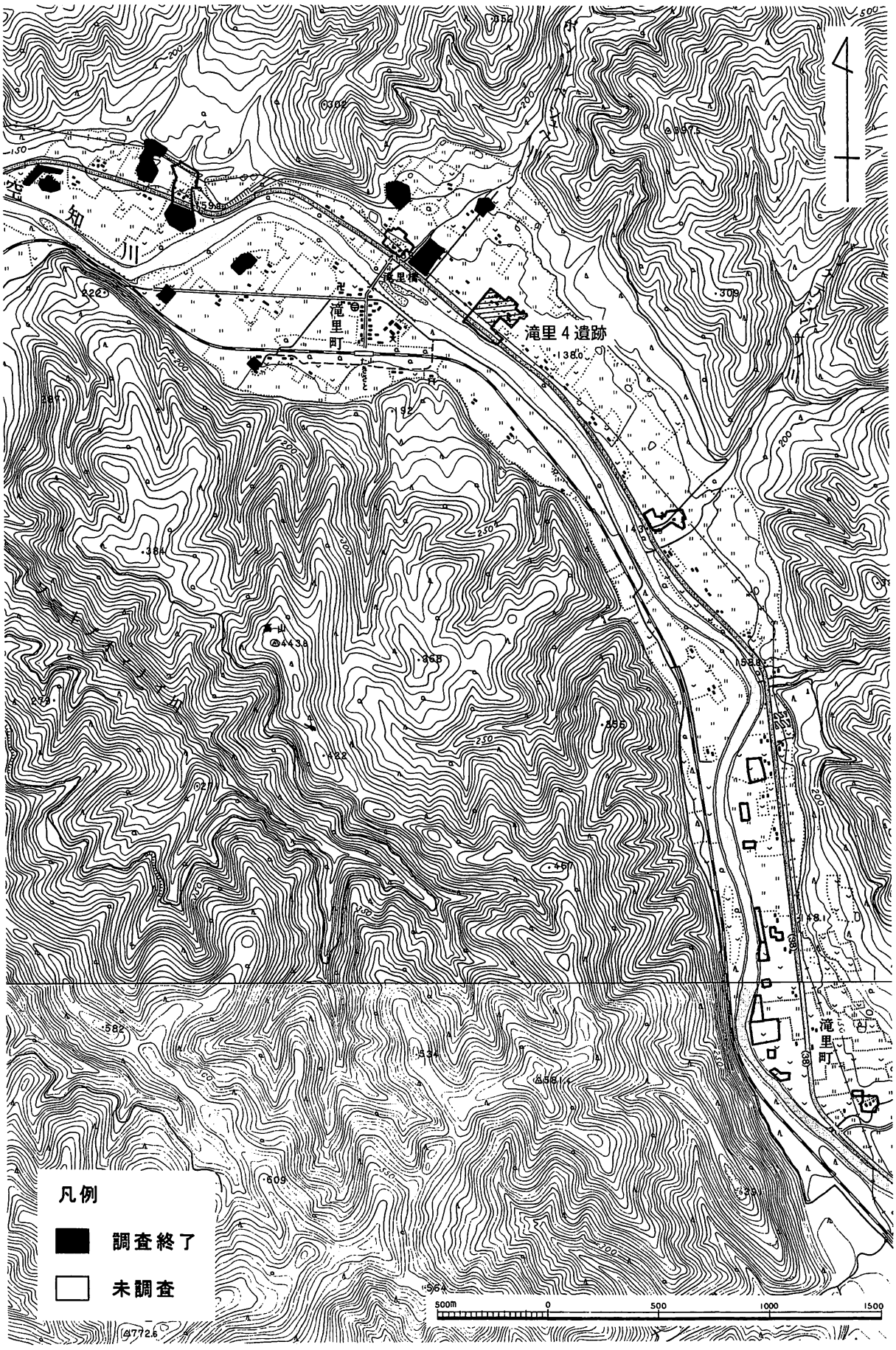
土壙は径１ｍ程の浅い円形のもので、伴出遺物はなく、時期・性格は不明である。Ｔピットは溝状の形態のもので、１基には中央に杭穴がある。

遺物は土器片が約18,000点、石器等が約27,000点である。

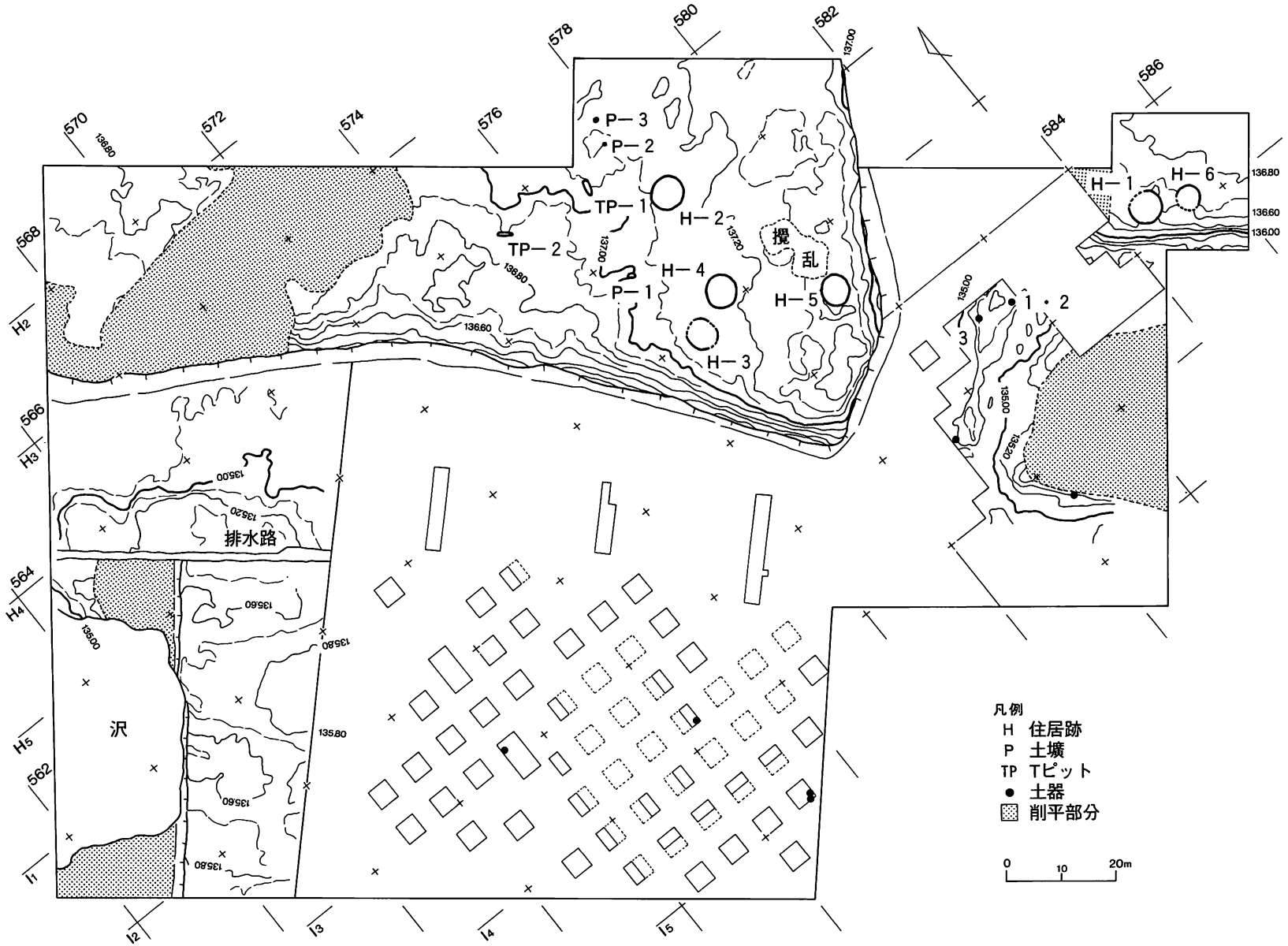
土器はその９割以上が早期の平底土器である。大多数のものが磨滅している。無文・条痕文のものが主で、沈線文のものがこれに次ぐ。清水町上清水２遺跡、豊頃町高木１遺跡等に類似の資料で、滝里遺跡群では初めての検出例である。口縁部に隆帯をめぐらせ短い刻み目をつけ、その下位に斜位の沈線を施す、アルトリ式・上坂式に相当する非常に良好な資料が、沢部分の包含層から検出されている（土器No.３）。また貝殻腹縁文の施文された土器もわずかながら検出されている。沼尻式に類似の資料である。このほか中茶路式、東釧路Ⅳ式、中期、晩期のものが出土している。

石器等はその約８割が黒曜石のフレイク、蛇紋岩の細片である。石器はその形態的特徴から早期に属するものが多い。柳葉形の長身鏃、不定形のスクレイパーが多く、頁岩製、黒曜石製のつまみ付きナイフも数点出土している。礫石器では石錘、蛇紋岩製の石斧、断面が三角形のすり石が多く、そのほかに石皿、たたき石などがある。石斧製作に関わる研磨石材、擦り切り残片、砥石、石鋸が注目される。砥石には、ほかの石器から転用したものがある。

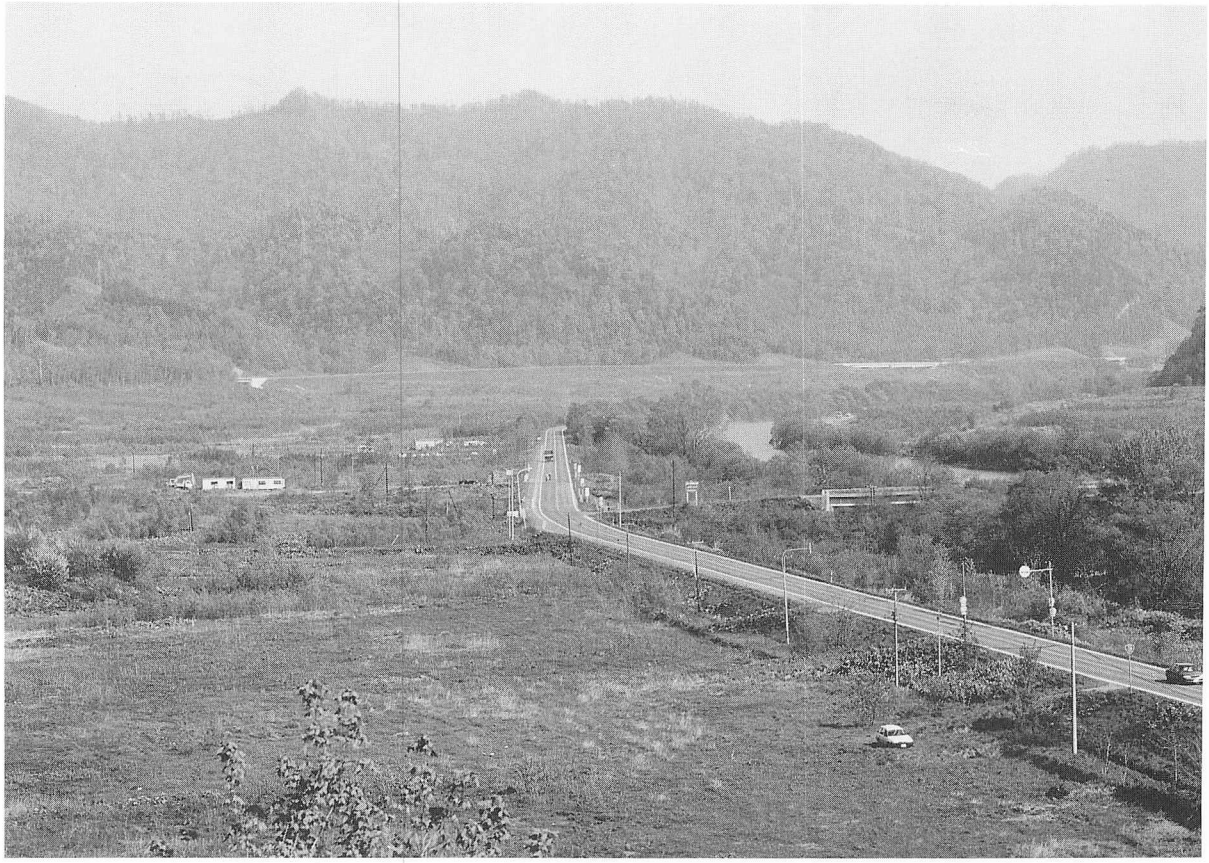
このほか無文・条痕文土器を使用した円盤状土製品、滑石製の垂飾が出土している。



遺跡の位置


P－3
P－2
TP－1
TP－2
P－1
H－1
H－2
H－3
H－4
H－5
H－6
撹乱
1・2
3
排水路
沢
凡例
H 住居跡
P 土壙
TP Tピット
● 土器
削平部分
0 10 20m

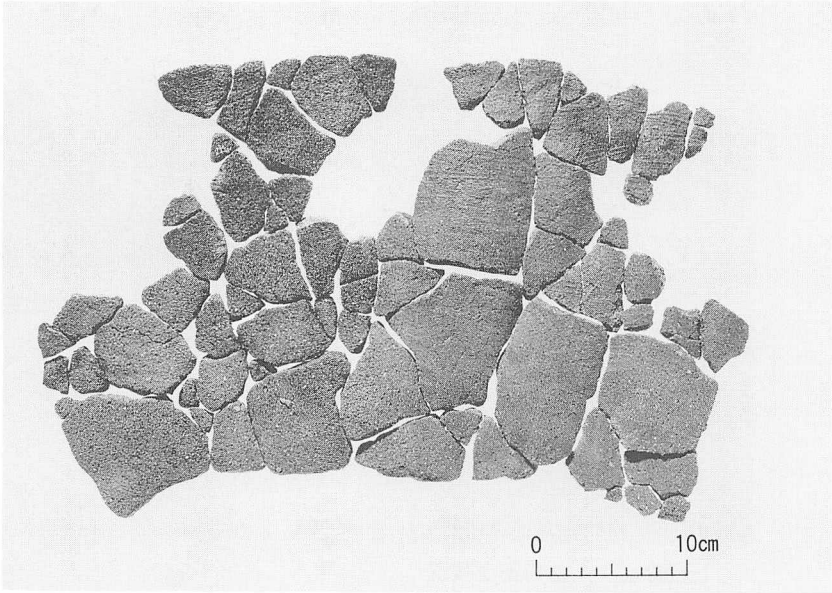
遺構位置図



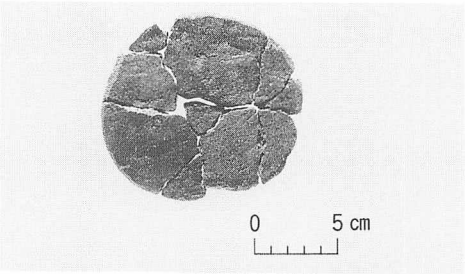
遺跡遠景

H－3・4の調査状況（手前がH－4）

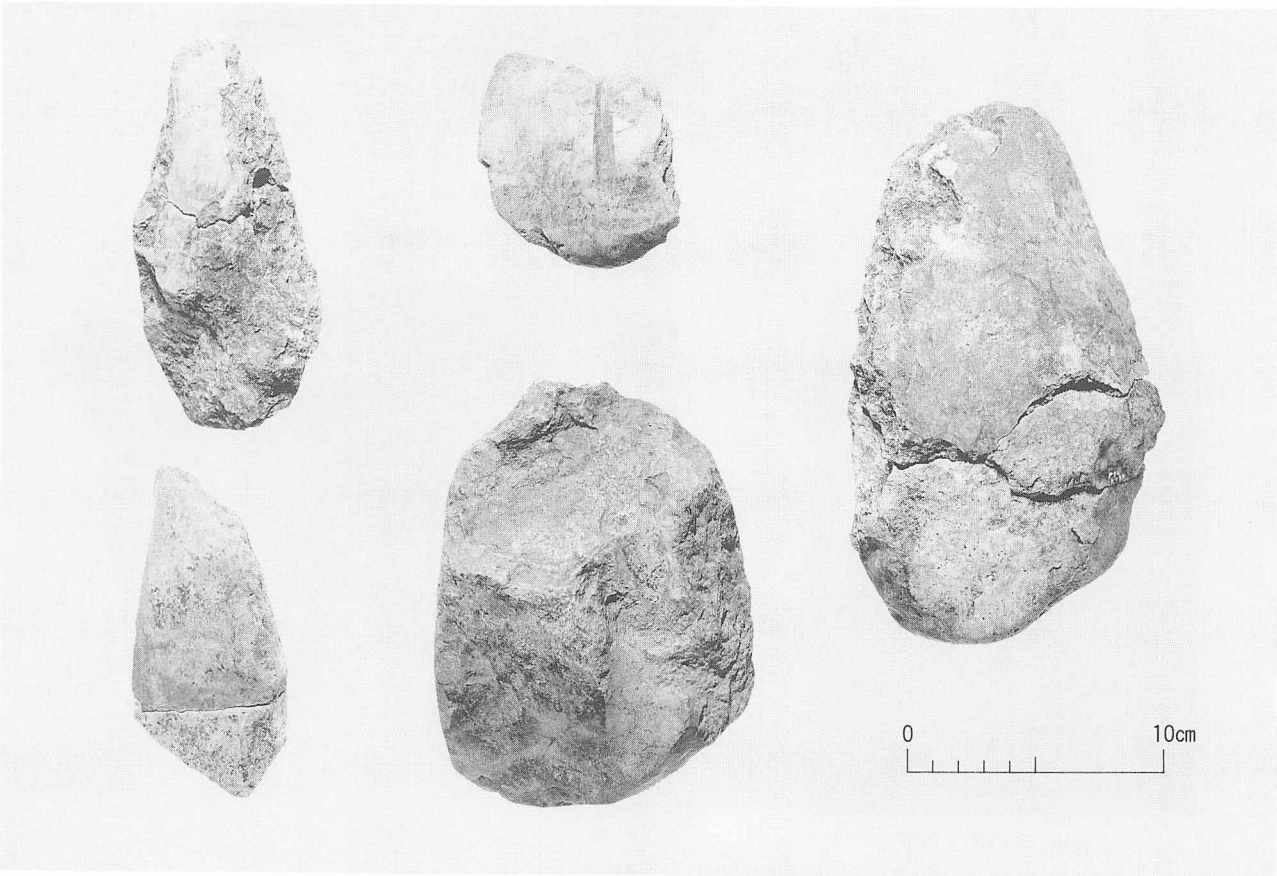
H－４の土器出土状況



H－４の土器

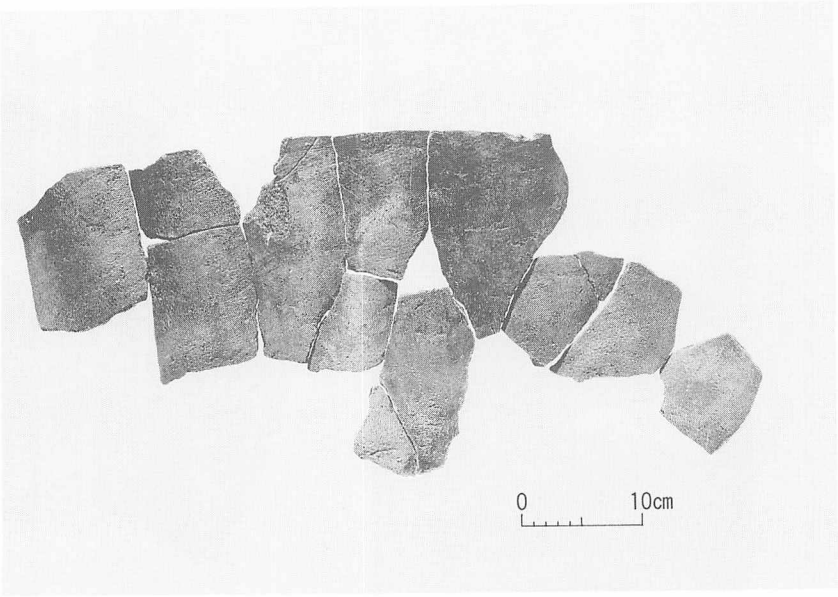


H－４の円盤状土製品

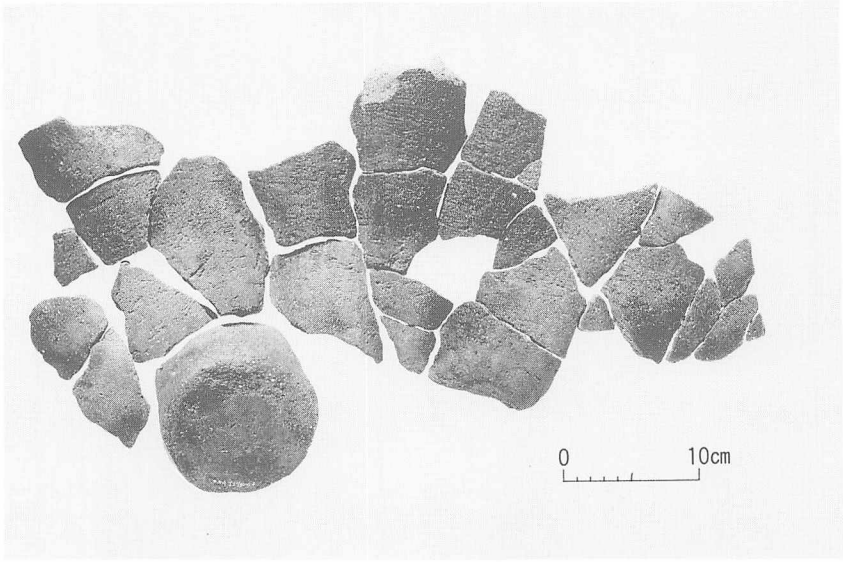


H－１の擦り切り残片・研磨石材（蛇紋岩製）

土器No. 1・2の出土状況
（I_2—580—20区）

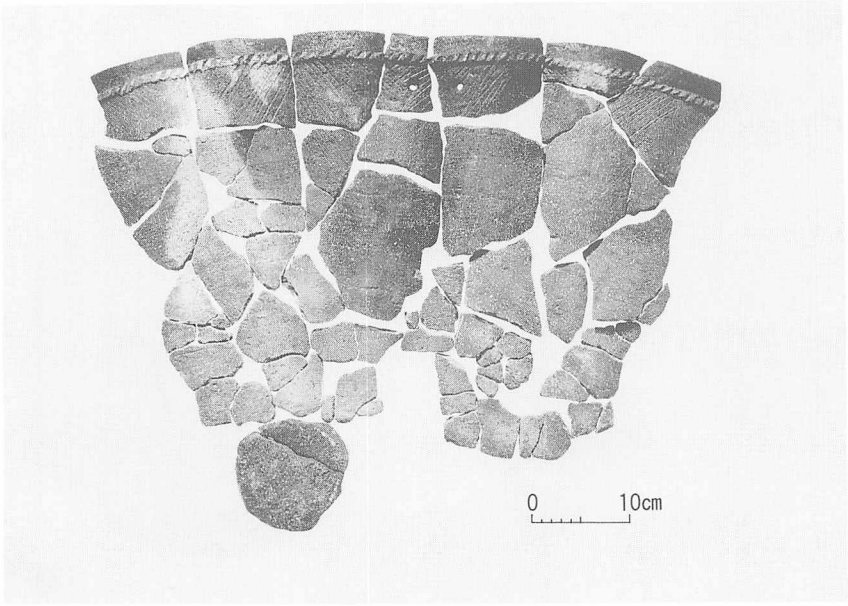


土器No. 1



土器No. 2

土器No. 3の出土状況
（I_2—580—13区）



土器No. 3

オサツ２遺跡（Ａ－03－14）

事 業 名：都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道石狩支庁

所 在 地：千歳市都268－１地先ほか

調査面積：810㎡

発掘期間：５月６日～10月25日

調 査 員：千葉英一、三浦正人、鎌田　望、鈴木　信

遺跡の概要

オサツ２遺跡は千歳市の北方約５㎞、長都川河口から約１㎞上流の右岸に位置している。この川の両岸には現在までのところ19ヵ所の遺跡が確認されており、その内11ヵ所は擦文時代の遺跡で下流に集中している。また、長都川に面して２ヵ所のチャシ跡があり、アイヌ文化期の遺跡も多く存在する。

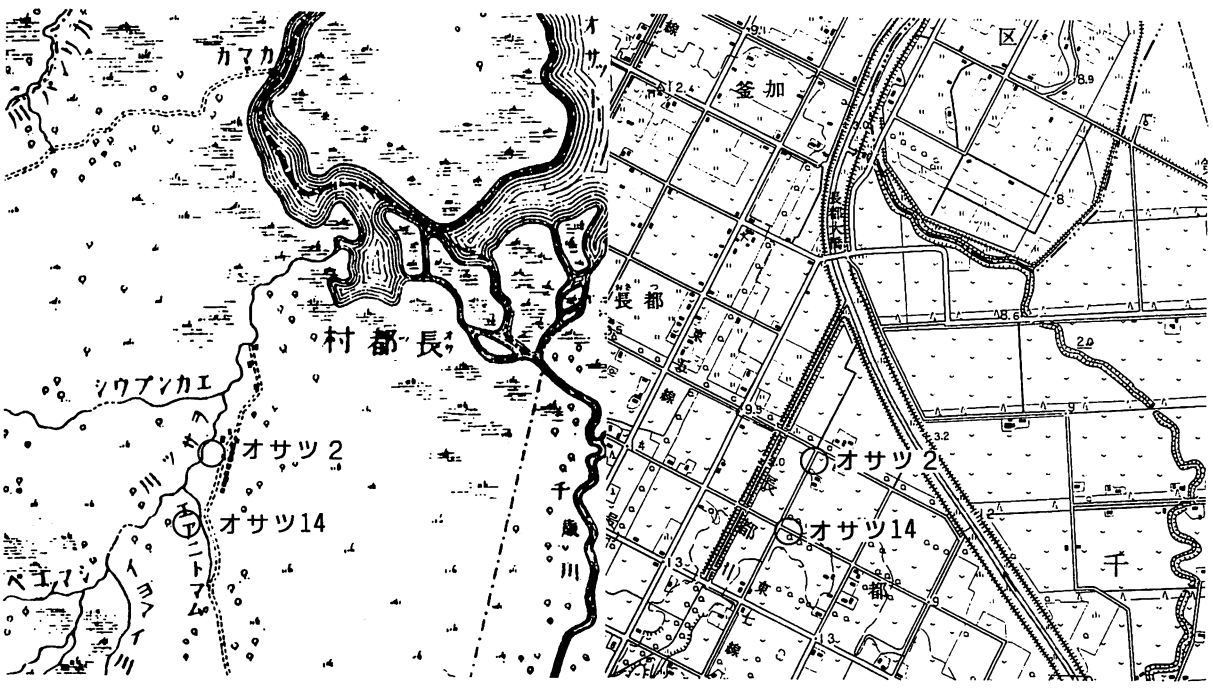
遺跡の北側に隣接する国有保安林の中には擦文時代の竪穴住居跡とみられる窪みが約20ヵ所残っており、南側の林の中や西側の畑の中にも多くの竪穴住居跡が分布している。これらのことから、本来はオサツ１・２・３遺跡は連続した擦文時代の大規模な集落跡と考えられる。

以前、長都川は千歳川に流れ込まず、長都沼（オサットー）に注いでいた。長都沼は馬追沼（マオイトー）とともに昭和20年代から本格的に行われた干拓工事によって埋め立てられ、長都川もその後直線化された。このため遺跡が形成された当時とは景観が大きく変貌している。

遺構と遺物

平成４年度の調査は段丘上面の調査と川岸低湿部のトレンチ調査を行った。その結果、段丘上面からは旧石器時代の遺物（ビュアリン、石斧未製品、細石刃）をはじめとして、縄文時代のＴピット、続縄文時代の土壙墓、擦文時代の竪穴住居跡14軒、アイヌ文化期の土壙墓、多数の杭穴や焼土が出土した。いっぽう低湿部からは、擦文時代以降の木製品（中柄、櫂、杭）が出土した。

平成５年度の調査は、調査区北部の段丘上面と調査区南部の旧長都川の岸辺についておこなった。旧石器時代の焼土１ヵ所。縄文時代中期後葉から後期初頭の竪穴住居跡24軒、土壙14基、Ｔピット３基、土器集中２ヵ所、フレイク集中１ヵ所、焼土５ヵ所。続縄文時代の土壙墓３基、土壙３基。擦



遺跡の位置（左：明治29年仮製１/50,000図　右：平成２年修正１/50,000図）

文時代の竪穴住居跡５軒、鍛冶遺構１ヵ所、銑鉄片集中１ヵ所が検出された。

縄文時代の竪穴住居跡については、北筒式土器群を含まず、柏木川式から余市式土器群までの継続がみられ、６群位にまとまる。平面形は、円形→底が平らたい卵形→隅丸台形へと変化している。

また、擦文時代の竪穴住居跡については、苫小牧火山灰のあり方や覆土の堆積からみて３時期に分かれるものと思われる。

平成６年度の調査は、調査区ほぼ中央の段丘面と低湿部、調査区南端の低湿部についておこなった。段丘面の調査では、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡が３軒、焼土１ヵ所が検出された。

低湿部の調査は、鋼矢板による止水及び調査区壁の崩落防止の安全対策を行い、４インチポンプで排水しながら手掘調査を行った。その結果、道跡１条、炭化物集中３ヵ所、立杭などが検出され、木製品が約1,000点出土した。

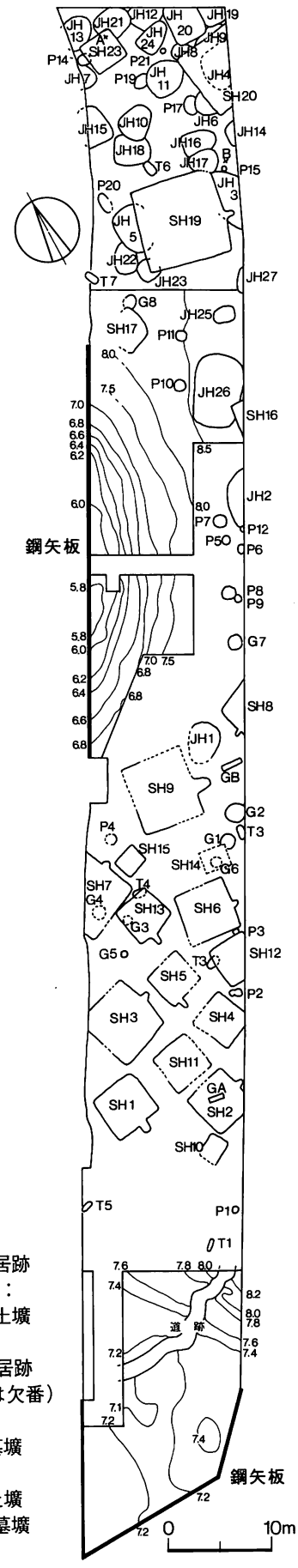
基本層序は6.5ｍを境にして、上部は斜面からの堆積で、台地の層序と近似している。下部は木製品を大量に含む珪藻土層と草本、木本を多量に含む泥炭層が堆積している。さらにその下には、水磨を受けた恵庭降下軽石が長都川の堆積作用によって互層を形成している。なお、旧流路の底と思われる地点からは後北 C_2－Ｄ式の深鉢が出土している。

低湿部の遺構は道跡１条、炭化物集中３ヵ所、立杭で、いずれも擦文時代以降のものである。道跡は斜面を下って調査区を横切り、さらに低い方に伸びていっている。このことから舟着場等の遺構は、現河道よりのところにあると推定される。

遺物は擦文時代からアイヌ文化期にかけてのもので、約９割が擦文時代以降の木製品であった。内容は櫂、矢の中柄、矢柄、串、団子篦、漆椀、曲物、樽、下駄。ほかには、建材・土木材としての杭・角材・枝材・丸木材・割材。加工の際にできた切片・木端。燈火・焚付用のシラカバ樹皮巻、薪の燃え端などである。

	旧石器	縄　文	続縄文	擦　文	アイヌ文化	続縄文以降
竪穴住居跡		27		20		
土　壙　墓			8		2	
Ｔ ピ ッ ト		7				
土　　壙		16	6			
焼　　土	1	10				41
道　　跡					1	
鍛 冶 遺 構				1		
銑鉄片集中				1		
炭化物集中					3	
土 器 集 中		2		2		
礫　集　中						2
フレイク集中		1				
杭　　穴						1,300

JH１～27：縄文時代の住居跡
P１～４・８・９・13～22：縄文時代の土壙
T１～７：Tピット
SH１～23：擦文時代の住居跡（18・21・22は欠番）
XA・B：鍛冶関係遺構
G１～８：続縄文時代の墓壙
P５～７・10～12：続縄文時代の土壙
GA・B：アイヌ文化期の墓壙



遺構位置図

調査状況（南側）

土層断面（北側）

土層断面（南側）

遺物出土状況

中　　柄

曲　　物

団子篦

櫂受部

漆　　椀

履　　物

オサツ14遺跡（Ａ－03－245）

事 業 名：都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道石狩支庁

所 在 地：千歳市都279－１地先ほか

調査面積：1,620㎡

発掘期間：５月６日～10月25日

調 査 員：千葉英一、三浦正人、鎌田　望、鈴木　信

遺跡の概要

オサツ14遺跡は千歳市街地から北へ約５㎞、オサツ２遺跡からは南南西に500ｍの位置にある。北北東に流れる長都川と、北流しこれに合流するエアニトマム川に挟まれた標高８ｍの低位段丘上に立地している。現状では、長都川は改修により直線化されて千歳川に注いでおり、エアニトマム川は畑地となり痕跡をとどめるだけになっている。周辺は一大畑作地帯で、川の合流部付近という遺跡立地景観は今は見られない（図はオサツ２遺跡参照）。

調査は農道改良工事によるもので、調査区は土地改良区画東７線南25号の南25号道路下にあたる幅約18ｍ×長さ90ｍの範囲である。遺跡の範囲は調査区を中心に南北に広がっている。

調査区の現況は道路下ではあったが、1739年降下の樽前ａ火山灰が残存しており、遺跡包含層は比較的良好な状態であった。ただし、側溝や水道管により筋状に破壊されており、北側は上層が畑作によって攪乱されている。また、調査区西端には長都川旧流かそれに沿う小河川による低湿部が存在する。

遺構と遺物

遺構は建物跡・住居跡32軒、土壙51基、焼土40基を確認した。遺物の総点数は58,774点で、内訳は土器・土製品31,089点、剝片石器487点、剝片25,581点、礫石器392点、礫1,168点、玉２点、木製品53点、鉄製品２点で、他に動植物遺存体がある。

アイヌ文化期：柱穴列・炉や盛土から確認した建物跡２軒（aH－１・２）のほか、焼土４基（aF－１～４）がある。aF－１の脇からは内耳鉄鍋が出土している。低湿部では串や割材などの木製品53点が出土している。

擦文時代：住居跡１軒（SH－１）、土壙１基（SP－１）を確認した。SH－１は竈をもたない一辺４ｍの正方形の住居跡である。全面に炭化した建材が残っており、中央部と南部は側溝等で破壊されている。遺構内とその周辺から擦文土器が出土している。SP－１はSH－１の北側にあり、覆土にSH－１の掘り揚げ土が入っている。

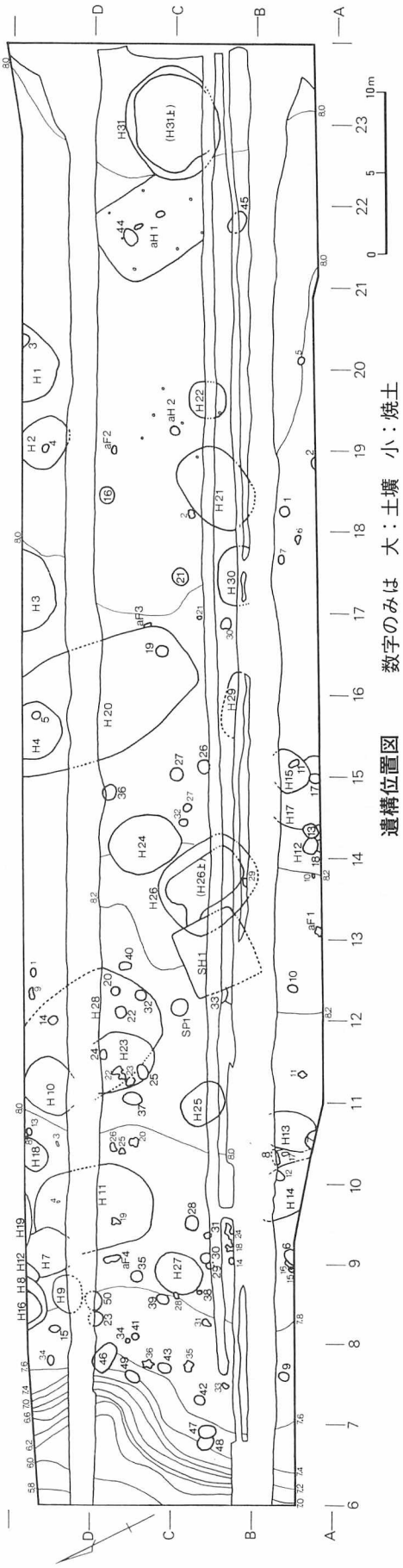
縄文時代：住居跡29軒（Ｈ－１～４・７～31）、土壙50基（Ｐ－１～50）、焼土36基（Ｆ－１～36）を確認した。住居跡は時期別に前期７・中期15・後期１・不明６軒に分けられるが、遺構の切り合いも多く、側溝等の破壊攪乱や調査範囲外への広がりなど、不確定要素を多々内在している。このうちＨ－11は前期前半、静内中野式から綱文式にかけての土器が見られる長径約7.5ｍの比較的大型のものである。中期では円筒上層式土器の時期に大型小型の住居が混在している。この中では、長径13～14ｍと推定できるロングハウスＨ－20が際だっている。南と西に壁周溝をもち、径30㎝前後、深さ60～70㎝ほどの主柱穴が５本ずつ２列に並び、炉も５基確認している。Ｈ－26・31もこの時期の長径６～７ｍの住居で、特にＨ－26は壁周溝の存在やしっかりとした主柱穴、フレイク・チップの集中など、同じ並びのＨ－20との深い関連がうかがえる。Ｈ－26・31ともに覆土の凹みを利用した上層遺構を確認している。後期には余市式の土器片囲い炉のある推定長

径10mのＨ－28が存在する。

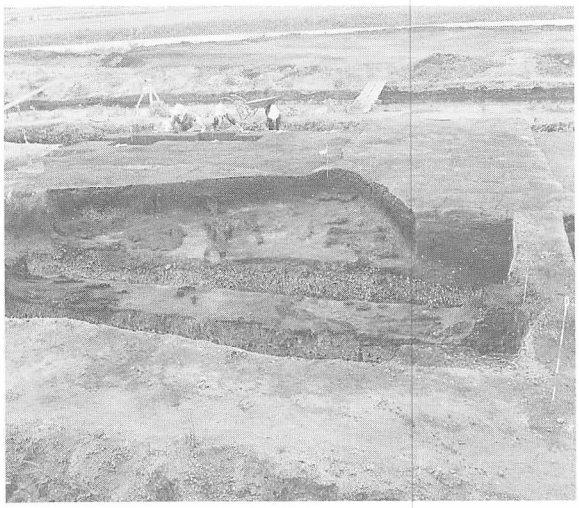
段丘平坦面に散在する土壙・焼土はともに、住居との関係をうかがわせる。西側段丘縁には群をなす土壙もある。土壙のうち、ヒスイ玉の入っていたＰ－25や一個体の土器があったＰ－40・46・47は、墓と思われる。住居覆土中にある焼土は上層遺構の炉の可能性がある。遺物分布は前期・中期・後期とも、遺構分布と同様にＨ－20付近を通る標高８ｍの等高線を境に、西半が濃い傾向にある。西端の低湿部には木製品はなく、後期主体の遺物の流れ込みが、樽前ｃ火山灰層と基盤層のあいだの腐植土中に見られる。

調査状況

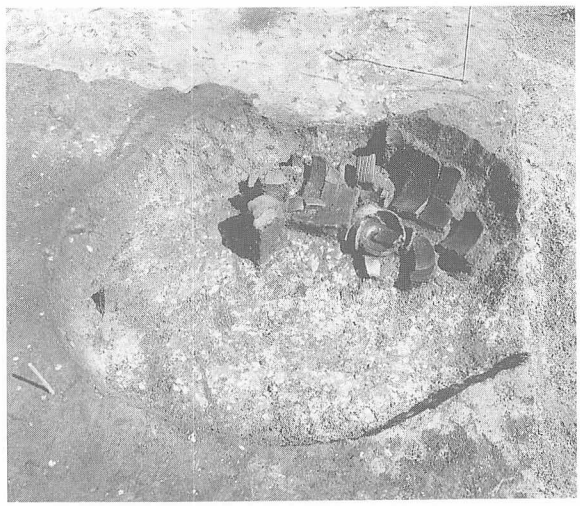
完掘状況



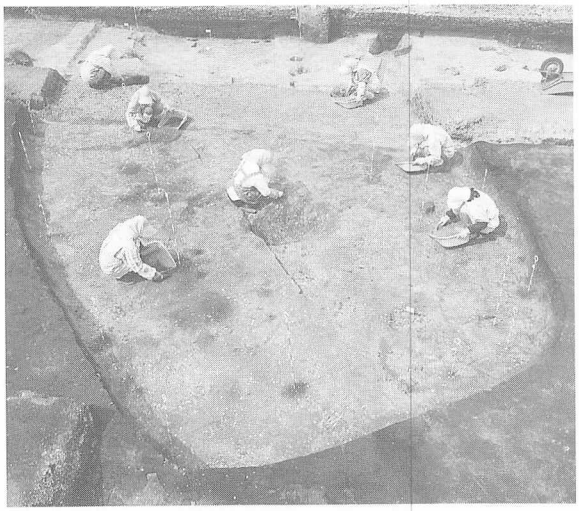
遺構位置図　数字のみは　大：土壙　小：焼土



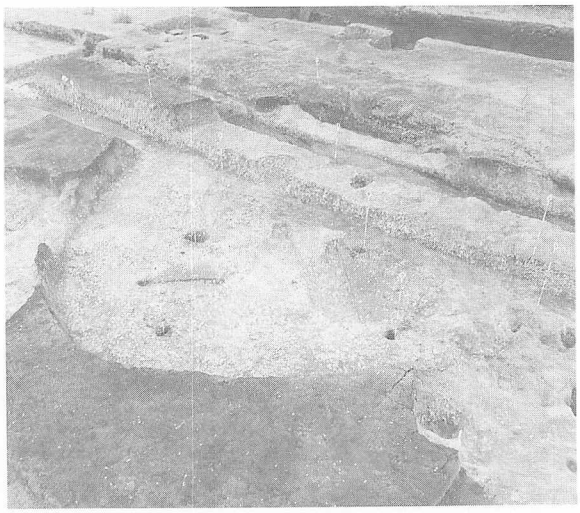
SH－１炭化材検出状況



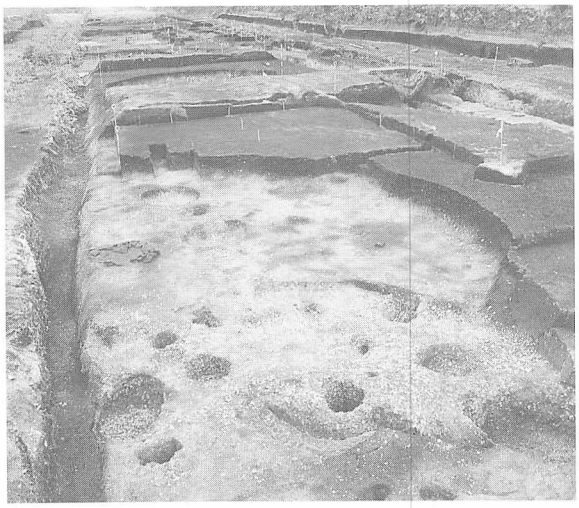
P－47土器出土状況



H　－　20



H－26（左：H－24、右：SH－１）



H－23とH－28の切り合い（奥H－28で新）

H－28の土器片囲い炉

高岡（たかおか）1遺跡（Ｊ－05－17）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：虻田郡豊浦町字高岡63－１ほか

調査面積：5,372㎡

発掘期間：５月６日～10月28日

調 査 員：西田　茂、立川トマス、藤原秀樹、末光正卓

遺跡の概要

高岡１遺跡は豊浦町市街地の西1.5kmにある。内浦湾（噴火湾）に向かって落ちこむ崖錐堆積物斜面のうちで比較的ゆるやかなところに立地している。南に開く傾斜地のなかに古別川と呼ばれる小川が急流となってかけ下っている。調査区域は古別川の両岸にまたがっており、川の東側を川東地区、西側を川西地区と呼んでいる。さらに今年度の調査区域として２か所の飛び地があり、北側のところを北地区、中央のところを中央地区と呼ぶことにした。

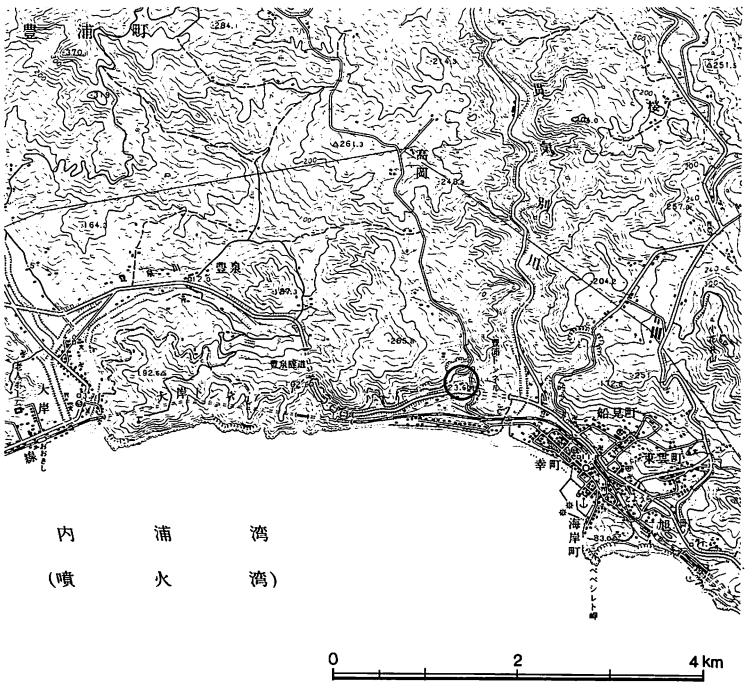
北地区　古別川の西にある、急な傾斜地である。標高は約35～43ｍ。道路用地になる前は、雑木林であった。当初の調査予定範囲の西半に町道（以前の旧国道）造成時の盛り土が見られた。この盛り土部分については崩落の危険があったので、すぐに調査を停止し、東側の安全な範囲について調査した。その結果、遺跡の範囲がさらに東側に拡大したので、道路建設工事に支障を来す最小の範囲にしぼって調査を行った。

縄文時代中期の土器、石器等が1,358点出土した。すり石、たたき石、石皿、台石等が多い。土壙（ＮＰ－１）は縄文時代中期のものであろう。

中央地区　古別川の西に接した、ゆるい傾斜地である。標高は約30～34ｍ。道路用地になる前は、雑木林であった。遺物包含層は、当初推定していた黒色土ではなく、その下の黄褐色粘質土であった。大小の礫の間から、縄文時代中期の土器が出土した。縄文時代後期（手稲式土器）の遺物が焼土（ＣＦ－１）を含む数ｍの広がりで出土したが、明瞭な遺構を検出することは出来なかった。土器・石器等が5,049点出土した。

川東地区　調査範囲は、前年度の調査区域に接する東側と北側である。東側は町道の盛土部分、北側は私道の盛土部分である。地形の大略は、北に高く南に低い。標高は約27～37ｍ。町道部分の一部では道路建設工事に際して遺物包含層が削平されたものらしく、まったく消失していたところがある。

前年度の調査成果から縄文時代早期後葉と縄文時代中期中葉の遺物出土が推定されていた。遺構は竪穴住居跡１、土壙２を検出した。竪穴住居跡（Ｈ－７）は縄文時代中期のものである。土壙は縄文



遺跡の位置

時代早期（Ｐ－７）、縄文時代中期（Ｐ－６）のものである。Ｐ－７の底部近くから中茶路式土器が検出された。

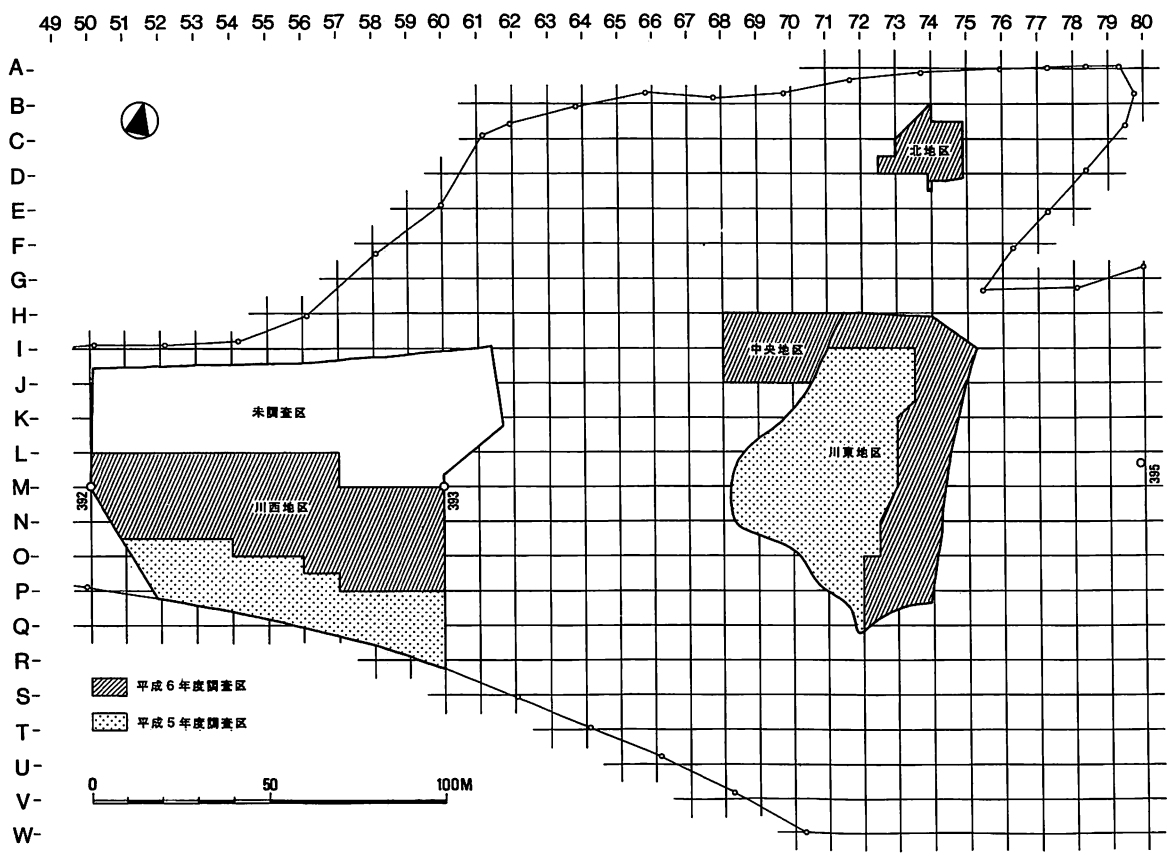
土器、石器等の出土遺物は13,800点である。型式的特徴の明らかな土器は、縄文時代早期のアルトリ式、東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式、縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、榎林式、大安在Ｂ式、煉瓦台式、静狩式などが多く出土している。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、すり石、石皿、石鋸、砥石、石錘などがある。縄文時代中期とみなされる石棒も出土した。中茶路式土器の土製円盤もある。原産地豊泉と見られる黒曜石の礫、残核、剝片・砕片等が多く出土している。

川西地区　調査範囲は、前年度の調査区域に接する北側である。地形の大略は南に傾斜している。東側には南に開く沢地形が認められる。標高は約28～43ｍ。道路用地になる前は、おもに畑地として利用されていた。

前年度の調査成果から縄文時代中期後半の遺物出土が推定されていた。竪穴住居跡６（ＷＨ－１～ＷＨ－６）、土壙３（ＷＰ－１～ＷＰ－３）はすべて縄文時代中期後半のものである。竪穴住居跡は中央部に石組み炉をもつものである。竪穴住居跡のＷＨ－１・ＷＨ－５・ＷＨ－６は重複しており、その時間的前後は〔６→５→１〕である。ＷＨ－５の床面からは煉瓦台式土器が大きな３破片となって出土した。ＷＨ－２の床面には、大きな砥石（15kg以上、四面砥石？）があった。

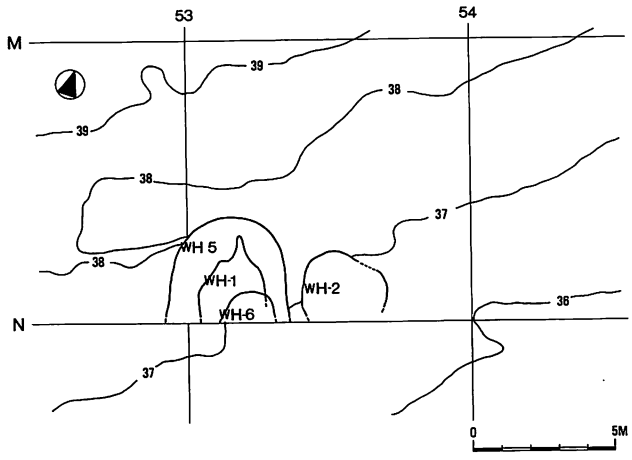
土器、石器等の出土遺物は260,000点である。型式的特徴の明らかな土器は、縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、煉瓦台式、大安在Ｂ式、柏木川式、北筒式、静狩式などが多く出土している。このほか少量ではあるが、余市式も出土している。



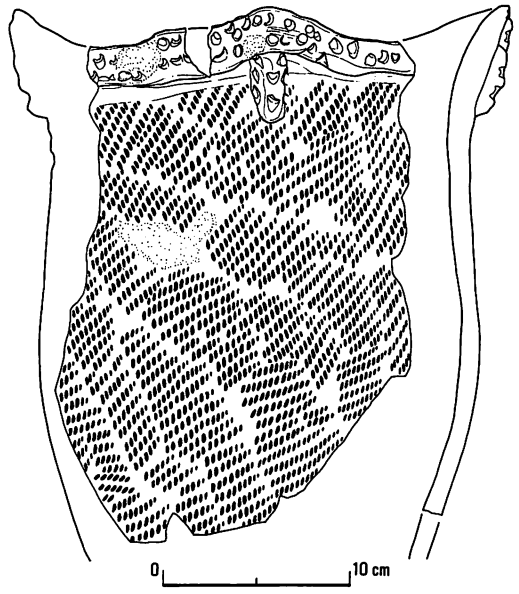
グリッド設定図・地区呼称と調査範囲

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、すり石、石皿、砥石、石錘などがある。石錐は灰緑色の頁岩を素材とし、剥片の一方に錐部を作り出した特徴的なものである。縄文時代中期のものと考えられる石棒もある。原産地豊泉と見られる黒曜石の礫、残核、剥片・砕片等が多量に出土している。

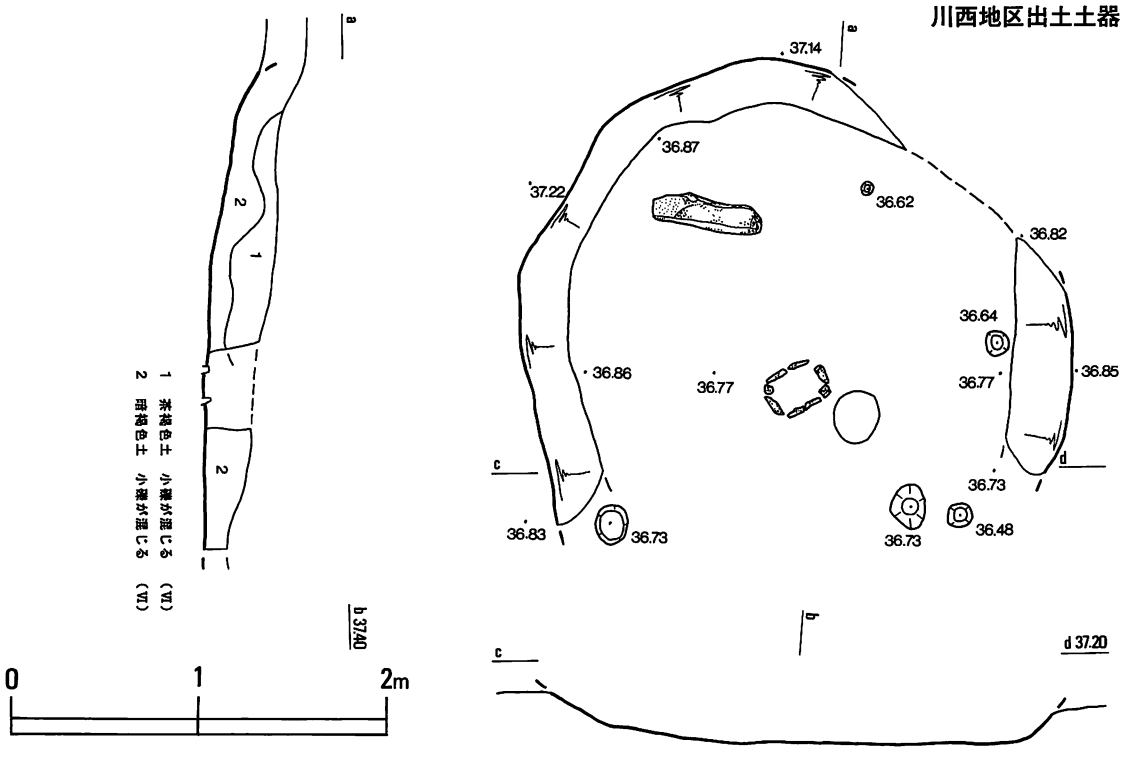
多量の土器・石器等の出土を見ると、川西地区では、縄文時代中期後半に密度の濃い遺跡が形成されている。とりわけ、原産地豊泉の黒曜石を使っての剥片剥離・石器製作が、住居の近くで行われていたことは、この遺跡の特色であろう。住居の廃絶後ほど遠からぬ頃に、風倒木の現象によって遺跡内ではいたるところで地面の横転があり、多くの遺構が破壊されてしまったものと推定される。



川西地区遺構密集部分



川西地区出土土器



川西地区住居跡WH－2

北地区　包含層調査状況

北地区　P－1

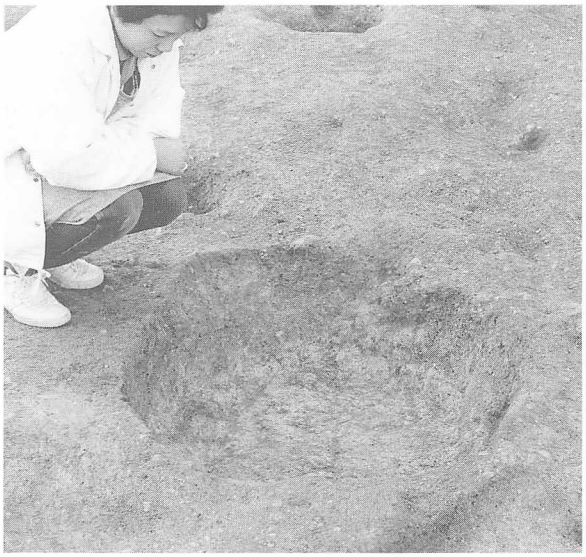
中央地区　包含層調査状況

川西地区　包含層調査状況

川西地区　H－１・２（左奥H－１、手前H－２）

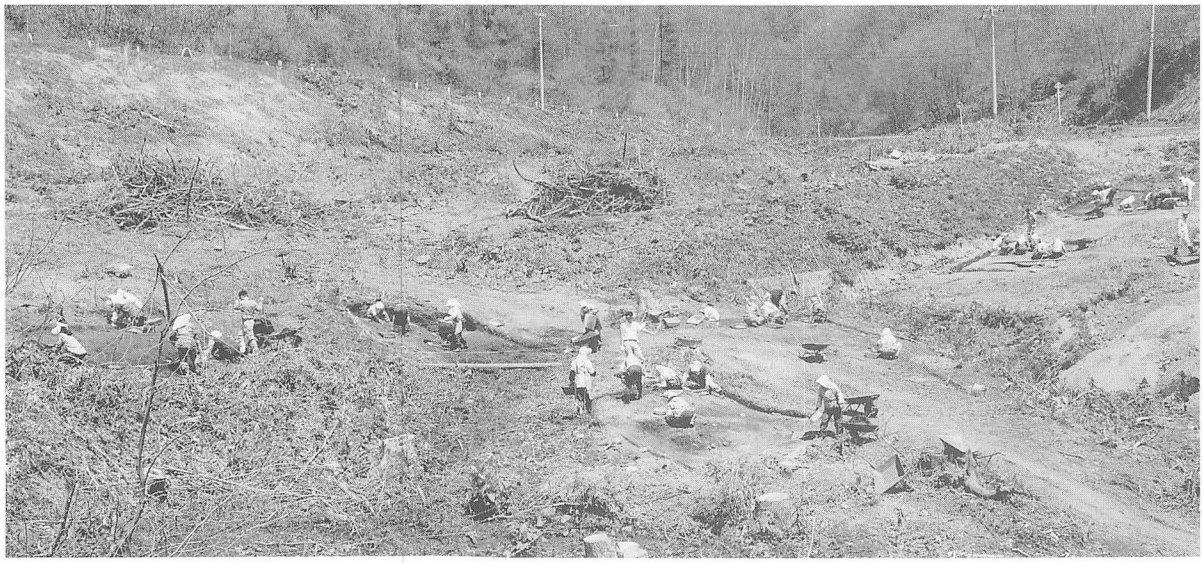
川西地区　H－１・５石組炉（奥H－１、手前H－５）

川西地区　H－２石組炉と床面出土の遺物



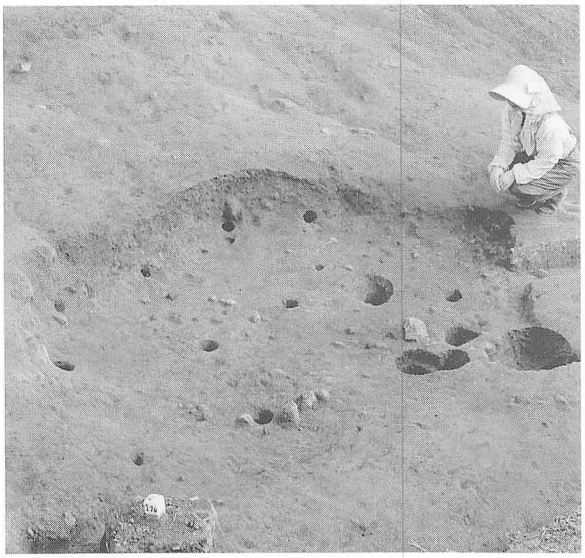
川西地区　P－１

川西地区　包含層遺物出土状況

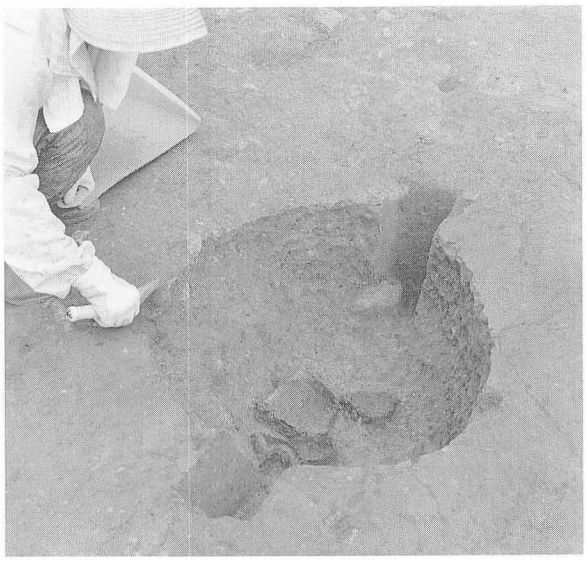


川東・中央地区　調査状況（右側：川東地区、左側：中央地区）

川東地区　包含層調査状況



川東地区　H－7



川東地区　P－1

キウス５遺跡（Ａ－03－93）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：千歳市中央852－18ほか

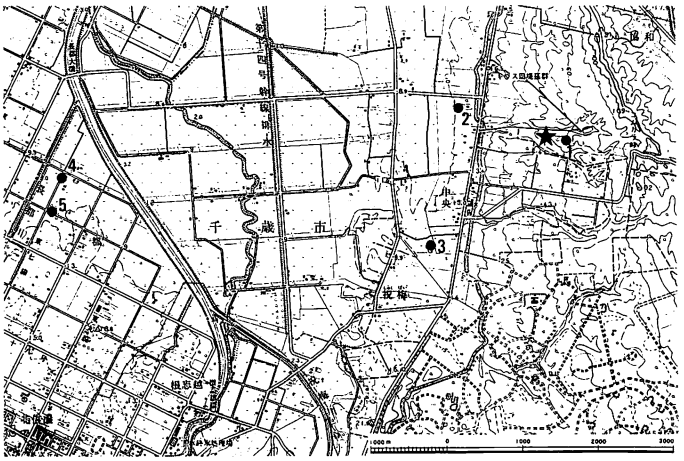
調査面積：3,000㎡（うち発掘終了面積1,270㎡）

発掘期間：５月６日～10月29日

調 査 員：鬼柳　彰、花岡正光、皆川洋一、西脇対名夫、中山昭大

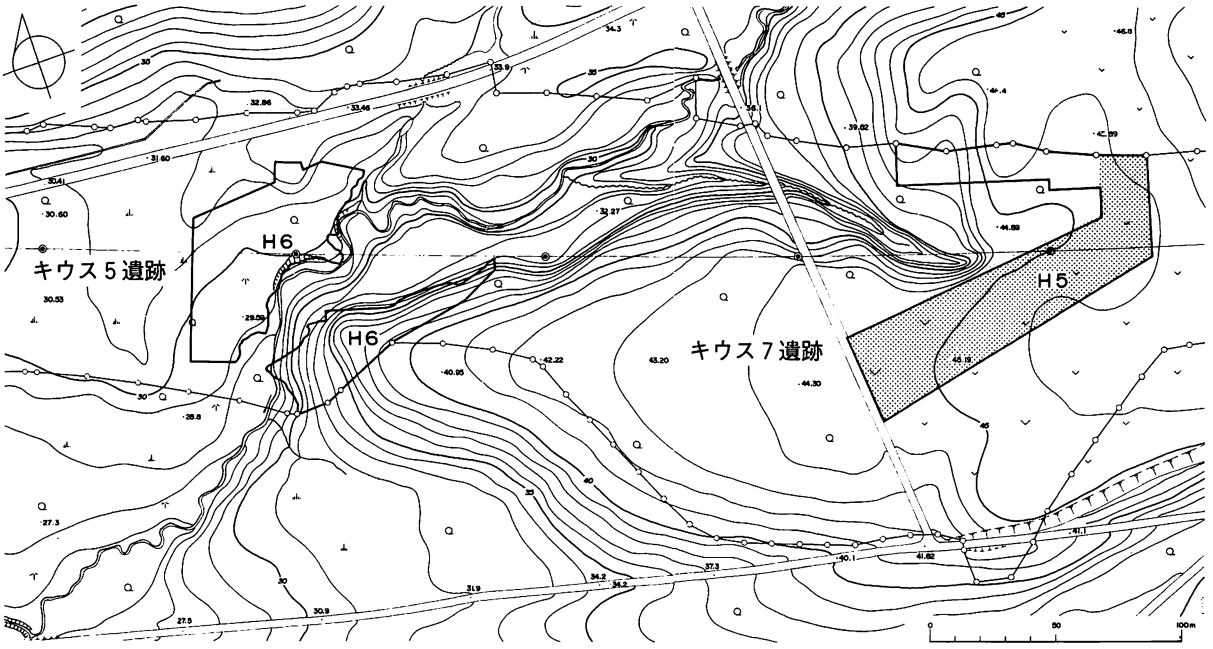
遺跡の概要

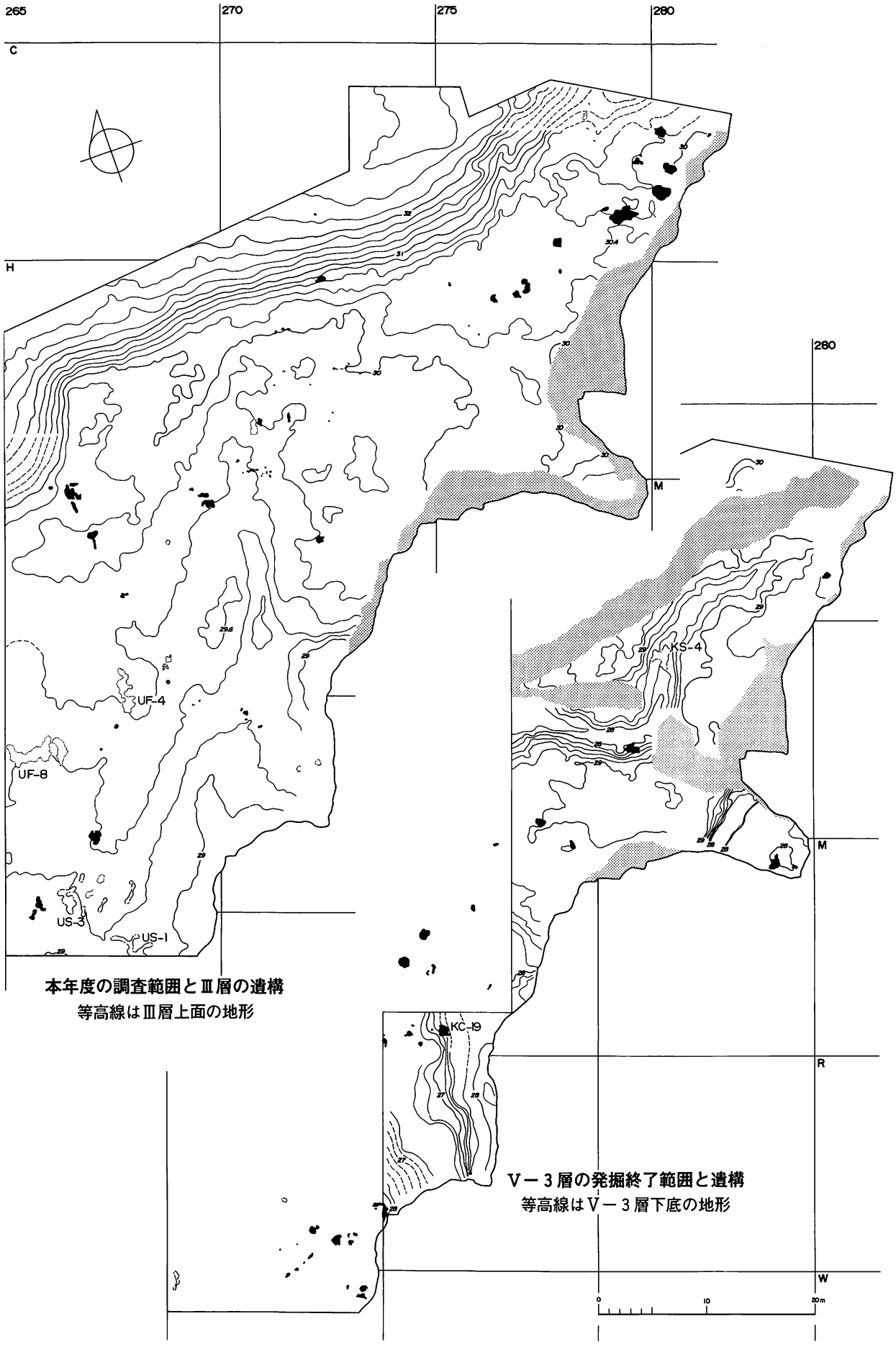
本遺跡は昭和63年度におこなわれた北海道横断自動車道（千歳～夕張間）工事用地内の埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査に際して確認され、本年度から発掘調査に着手したものである。遺跡は千歳市の東端を占める馬追（うまおい）丘陵の西麓、丘陵から西流して旧馬追沼に注ぐ小河のひとつキウス川の右岸に位置する。昨年度の発掘調査で縄文時代後期末の周堤墓群・盛土遺構が確認されたキウス４遺跡、国指定史跡キウス周堤墓群、縄文時代中期の環壕が発掘された丸子山遺跡にもほど近い（地図参照）。



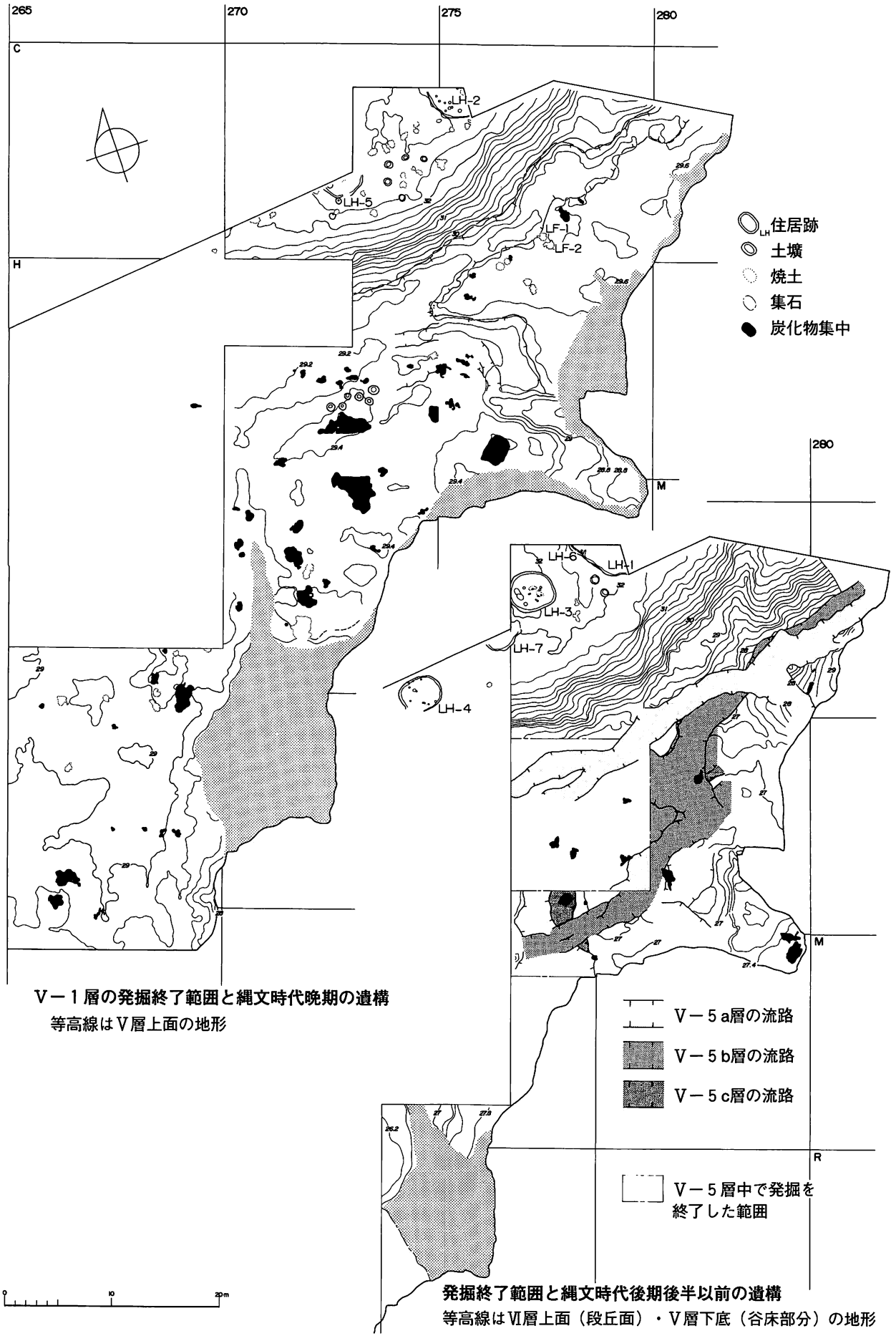
（左）**キウス５遺跡と周辺の遺跡**
星：キウス５遺跡　１：キウス７遺跡
２：キウス４遺跡　３：丸子山遺跡
４：オサツ２遺跡　５：オサツ14遺跡

（下）**キウス５遺跡・７遺跡調査範囲**
Ｈ５：昨年度調査範囲
Ｈ６：本年度調査範囲
網かけ部分は昨年度に報告済み




265
270
275
280
C
H
M
R
W
UF-4
UF-8
US-3
US-1
KS-4
KC-19
本年度の調査範囲とⅢ層の遺構
等高線はⅢ層上面の地形
Ⅴ－３層の発掘終了範囲と遺構
等高線はⅤ－３層下底の地形
0
10
20m

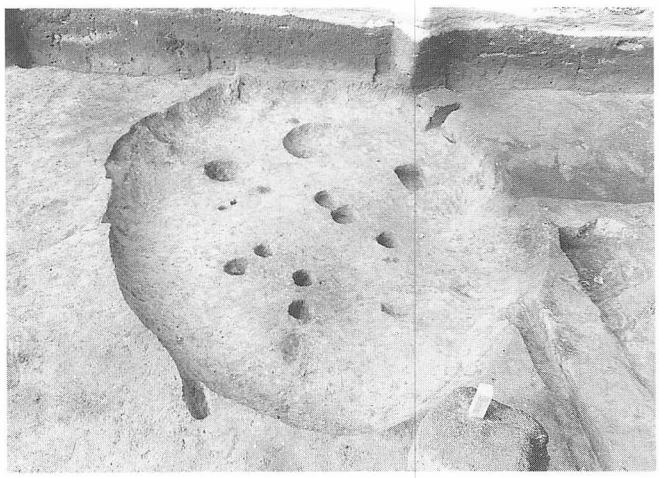
遺構位置図(1)



V－1層の発掘終了範囲と縄文時代晩期の遺構
等高線はV層上面の地形

発掘終了範囲と縄文時代後期後半以前の遺構
等高線はVI層上面（段丘面）・V層下底（谷床部分）の地形

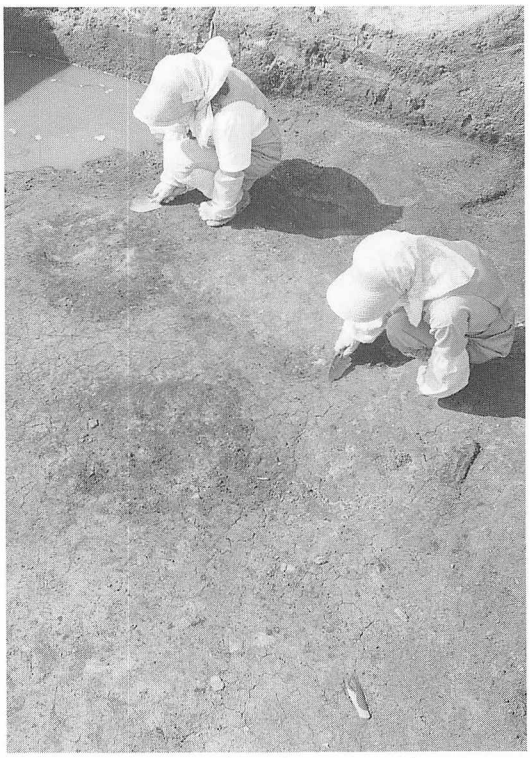
遺構位置図(2)



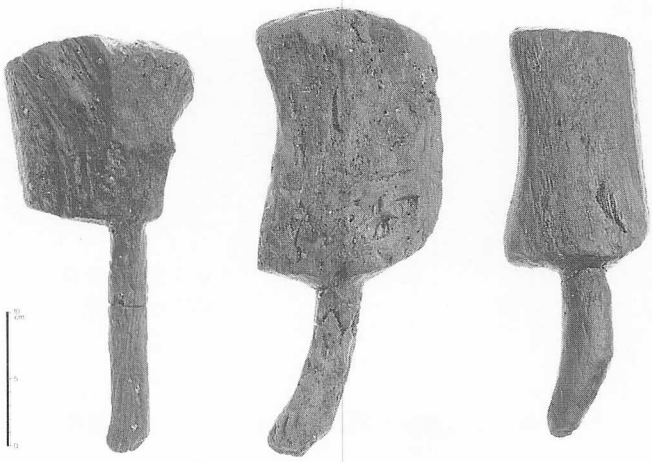
縄文時代早期の竪穴住居跡（LH－３）

炭化物集中（KC－19）と上面の礫

縄文時代中期の編物



焼土検出状況（LF－１・２）



縄文時代の槌状木製品

左：Ⅴ－３層（？）出土　後期後半？

中：Ⅲ－５層出土　晩期中葉

右：Ⅴ－１層出土　晩期中葉

本年度の調査範囲は自動車道がキウス川を跨ぐカルバート工事の用地にあたり、縄文時代の谷床に形成された沖積層（標高約27～30ｍ）が調査の主な対象となった（調査範囲図参照）。対岸のキウス７遺跡と同じくⅢ層（樽前ａ降下軽石堆積物と同ｃ降下火砕堆積物の間の埋没土壌、新千歳空港工事用地内の調査で確認される「第Ⅰ黒色土層」に対応）とⅤ層（樽前ｃ降下火砕堆積物下位の埋没土壌、同じく「第Ⅱ黒色土層」に対応）が主な遺物包含層である。谷床部分ではⅢ層・Ⅴ層とも細分され、Ⅲ－１（擦文時代か）・Ⅲ－５（縄文時代晩期）・Ⅴ－１（同晩期）・Ⅴ－３（同後期後半）・Ⅴ－５（同早期末～中期）の各包含層が間層を挟んで累重する。当初は谷床部分のⅤ層は概ね無遺物であるものと予想していたが、結果的には沖積層の下底まで縄文時代の遺物が出土し、各包含層中に形成された流路内からは木製品が確認されるなどして低湿部分の調査に多くの時間を費やした。11月より２次整理作業に入り、発掘の終了した1,270㎡については本年度末に調査報告書を刊行する予定である。

遺構と遺物

確認された遺構は竪穴住居跡７軒、土壙19基、焼土57ヵ所、集石６ヵ所、剝片集中３ヵ所、炭化物集中132ヵ所などである（遺構位置図参照）。このうち竪穴住居跡と土壙はすべてⅤ層の遺構である。

竪穴住居跡はいずれも標高32ｍ余りの段丘面に位置している。２軒は道央ではまだ類例の少ない縄文時代早期中葉のもので（写真参照）、十勝地方の暁式に近い土器が出土した。柱穴の覆土などで樽前ｄ降下火砕堆積物起源と見られるスコリアを確認したが、住居跡との先後関係は明瞭でない。また３軒は中～後期のもので、残る２軒は縄文時代晩期とみられる。晩期の住居跡は中～後期の住居跡に重複しており、古い竪穴の窪みを利用したものと考えられる。土壙はⅤ－１層で確認した８基を除いて段丘面上にある。１基は縄文時代早期、他の多くは晩期のものとみられる。いずれもほぼ円形で径数十㎝、深さ30～50㎝と小さいものが多い。２基が柱の抜取り跡と思われるほかは性格が不明である。

焼土も段丘面上に多いが、谷床部分でもⅢ－１・Ⅲ－５・Ⅴ－１の各層で確認されている。年代の判明した例では縄文時代晩期のものが多く、焼骨を含む例や周囲で剝片石器製作関連の遺物が出土する例がある。またⅢ－１層の焼土は確認できる限りでは白頭山－苫小牧火山灰らしいものより上位に形成されており、土器・石器をともなわない。炭化物集中のほとんどは谷床部分にあり、各層に見られる。一般に遺物に乏しいが礫の集積をともなった例が１ヵ所だけある（写真参照）。

遺物数は集計未了であるが概数３万点程度となる模様である。土器の半数以上は縄文時代晩期中葉のもので、タンネトウＬ式に先行する型式（ママチ遺跡２類土器など）が中心となる。次いで手稲式・鮏澗式・堂林式など後期後半の型式が多く出土し、他に縄文時代早期後半・前期前半・中期後半・後期初頭、さらに続縄文時代（後北Ｃ$_2$－Ｄ式）を経て擦文時代（須恵器）までの土器が確認されている。石器類では黒曜石製の剝片石器類が中心となる。礫石器類としては晩期に特徴的な碇石が見られ、石製品では晩期の翡翠製玉、また土製品ではやはり晩期の土製玉類がある。

低湿部分では少数ながら明確な木製品が出土し、特筆すべきものとして槌状の木器３点（縄文時代晩期中葉２点、後期後半？１点、写真参照）と細く裂いた木材で編まれた籠状のもの２点（縄文時代中期後半、出土状況写真参照）がある。前者は一方の側縁に厚みがあって他方は薄く、厚い方の縁は丸いものに当てたように湾曲した面をなす。後者は道内発見の編物としては最も古いものの一つである。木製品以外ではⅢ－５・Ⅴ－１層を中心に焼けた木の出土が多いほか、株・流木・種実、昆虫や淡水貝の遺体など自然遺物もよく遺存しており、遺跡形成当時の環境を窺うことが可能である。

キウス７遺跡（Ａ－03－265）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：千歳市中央852－31ほか

発掘期間：５月６日～10月29日

調査面積：1,600㎡

調 査 員：鬼柳　彰、花岡正光、皆川洋一、西脇対名夫、中山昭大

調査の概要

キウス７遺跡は千歳市街地より北へ約10km、馬追丘陵の西裾野を流れる小河川（キウス川）沿いに見つかった遺跡の一つで、標高35～45ｍ程のキウス川左岸段丘上に広がっている。第２回目となる今回の調査は前年度よりも約200ｍ下流の遺跡西端部を対象とした。

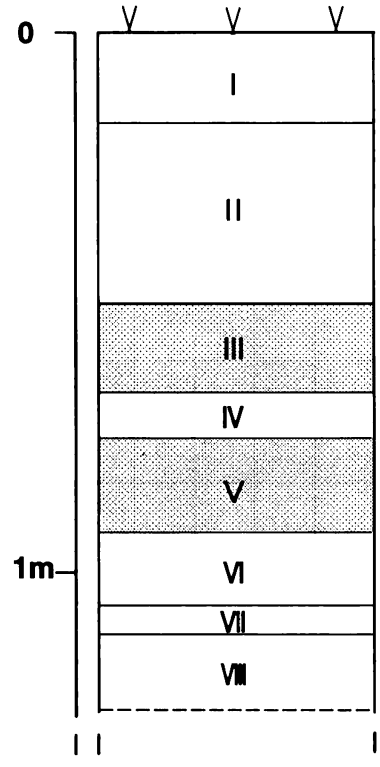
地形は段丘面より伸びた舌状台地上の狭い平坦部とそこから北方と西方に向く斜面（Ⅲ層上面で標高約40～32ｍ）からなっており、キウス川に面した斜面の終端は河川で削られ崖になっている。遺構・遺物が崖の間際まで分布していることから縄文時代末頃には緩斜面が下方まで伸びていたと考えられる。崖を挟んだ現在の河川との比高差は約５ｍ、対岸にあるキウス５遺跡の低湿部との比高差は約４ｍである。

基本となる土層は、上からⅠ層が表土、Ⅱ層が樽前ａ降下軽石（Ｔａ－ａ）、Ⅲ層が「第Ⅰ黒色土」対応の腐植土、Ⅳ層が樽前ｃ降下軽石（Ｔａ－ｃ）、Ⅴ層が「第Ⅱ黒色土」対応の腐植土、Ⅵ層が漸移層、Ⅶ層が恵庭ａ降下軽石の風化ローム（Ｅｎ－Ｌ）、Ⅷ層が恵庭ａ降下軽石（Ｅｎ－ａ）である。遺構・遺物はⅣ層を挟む上下二枚の腐植土層（Ⅲ・Ⅴ層）とその下位の漸移層（Ⅵ層）から見つかっている。

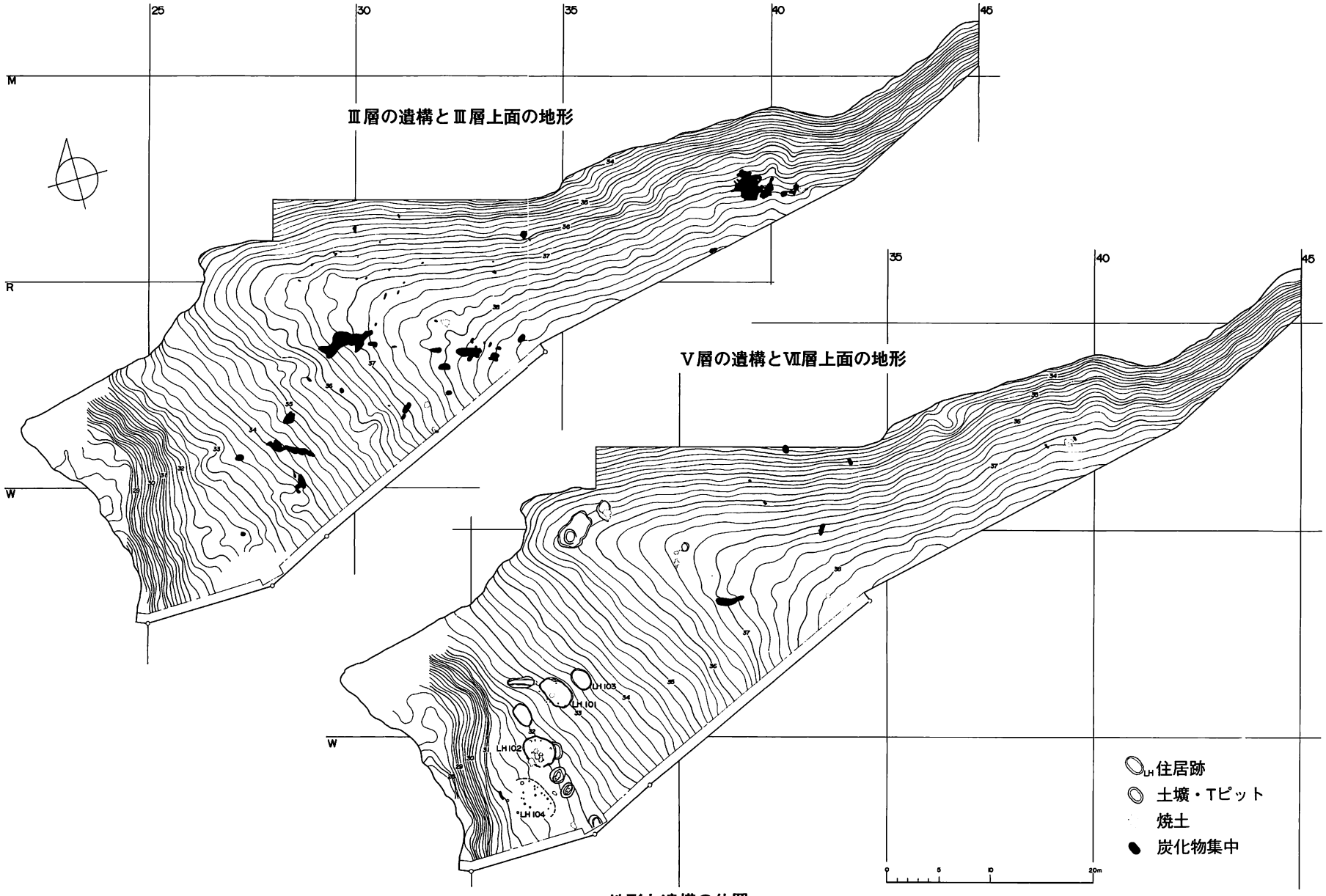
遺構と遺物

遺構は、住居跡（４軒）、土壙（６基）、Ｔピット（４基）、焼土、炭化物集中等がある。住居は西側斜面下方の傾斜がやや緩くなった地形上に纏まって見つかっており、時期はＬＨ－101～103が縄文時代後期、ＬＨ－104は晩期と考えられる。土壙はＬＰ－101が縄文時代後期の墓、ＬＰ－106が早期末の竪穴様のもので、その他は時代・性格共に不明である。ＴピットはＴＰ－101～103が壙底に杭跡の見られる小判形、ＴＰ－104が杭跡のない溝形である。

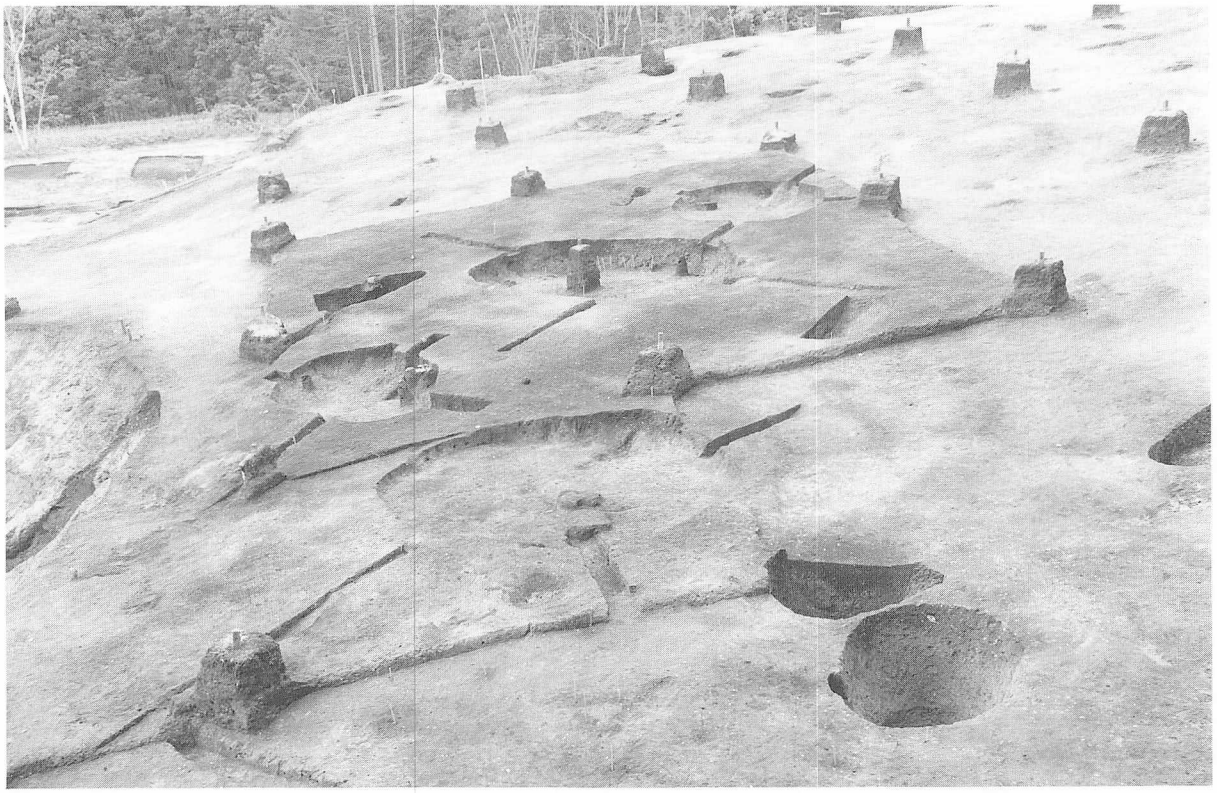
遺物は、主に住居跡を中心にその周辺と北向きの段丘縁辺付近から出土している。縄文時代早期・後期・晩期・続縄文時代・擦文時代のものが出土しており、この内主体となるのは後・晩期のものである。土器はコッタロ式、手稲式・タンネトウＬ式、後北Ｃ$_2$－Ｄ式、擦文土器などがあり、石器は石鏃、ポイント、ドリル、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、楔形石器等が出土している。



基本土層模式図


Ⅲ層の遺構とⅢ層上面の地形
Ⅴ層の遺構とⅦ層上面の地形
25
30
35
40
45
M
R
W
LH 101
LH 102
LH 103
LH 104
LH 住居跡
土壙・Tピット
焼土
炭化物集中
0
5
10
20m

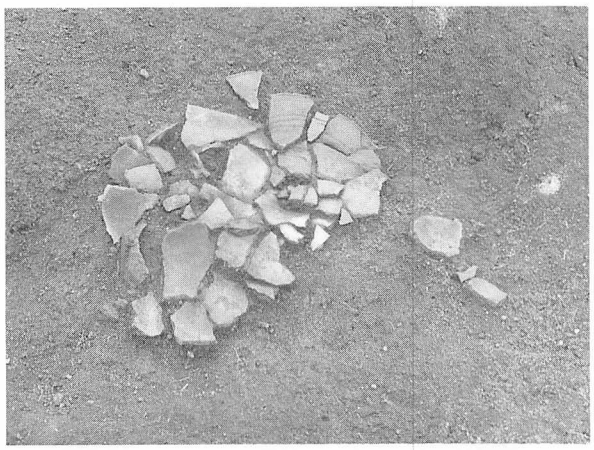
地形と遺構の位置



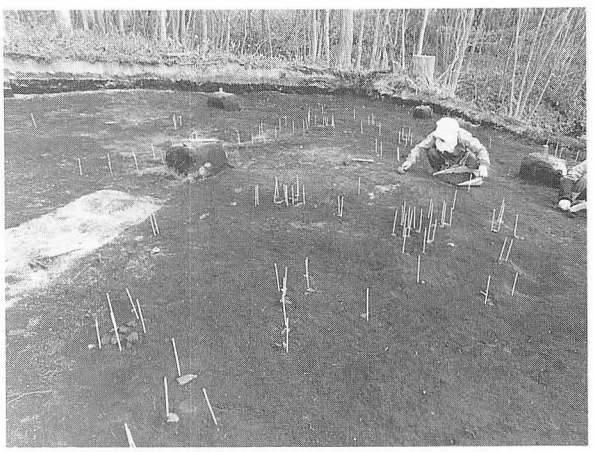
住居跡等の検出状況

土壙（LP－101）

Tピットセクション（TP－103）



擦文土器出土状況



遺物出土状況（Ⅴ層）

ケネフチ８遺跡（Ａ－03－264）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：千歳市協和1172－１ほか

調査面積：830㎡

発掘期間：９月19日～10月29日

調 査 員：鬼柳　彰、花岡正光、皆川洋一、西脇対名夫、中山昭大

遺跡の概要

千歳市東部の馬追丘陵中に源をもつ嶮淵（けぬふち）川は、山間部を切って西流し千歳川に入っている。本遺跡は上流部の左岸に向かって張り出す低い尾根上に立地している。キウス５・７遺跡からは東方約５㎞に位置にあたる。川筋には、ほかに７ヵ所の遺跡が所在しており、横断自動車道用地内ではこのうちケネフチ５遺跡の発掘が予定されている。

調査区は、尾根の先端から東方約80ｍのところを通る道と、尾根の頂部を東西に走る道路用地境界および尾根の南側裾で、ほぼ三角形に区画された範囲である。尾根のうち用地境界より北側の大部分は、土取りされ平坦地になっている。南西部の斜面も削られており、本来の地形はあまり残っていない。標高は29～35ｍ。平坦地は頂部に数十㎡しかなく、大半は斜面になっている。

表土・Ｔａ－ａ火山灰の下に、Ｔａ－ｃ火山灰を挟んで遺物包含層のⅢ層（第Ⅰ黒色土層）とⅤ層（第Ⅱ黒色土層）が堆積している。Ⅵ層（ローム）以下では遺物は出土していない。表土からⅢ層までは、以前行われた抜根による攪乱孔が多数みられる。

遺構と遺物

検出された遺構は、焼土２ヵ所（Ｆ－１・２）とＴピット５基（ＴＰ－１～５）。頂部のⅤ層中で検出された二つの焼土は径20㎝前後、Ｆ－２では焼けた黒曜石剝片が数点出土した。

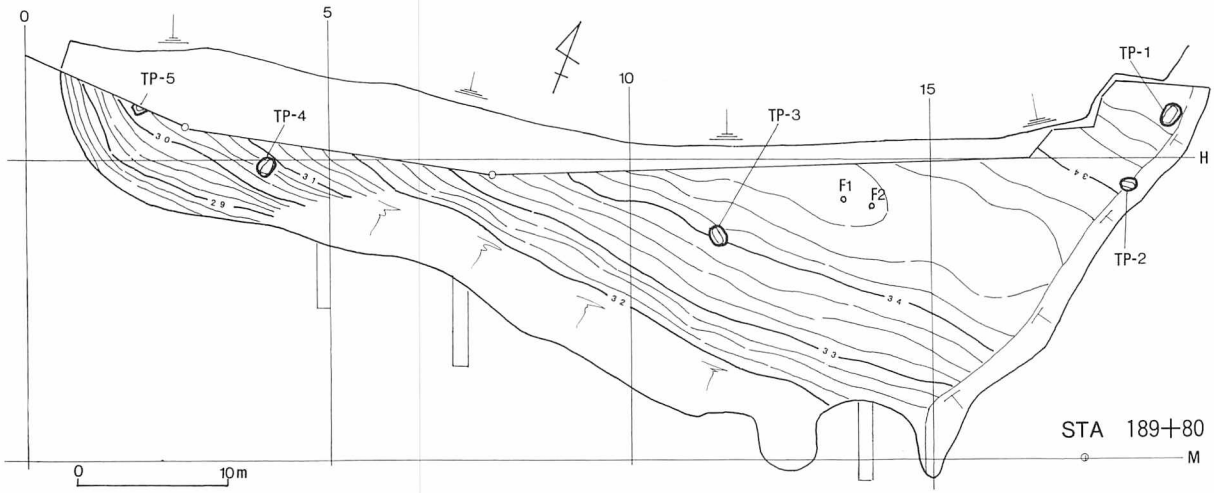
Ｔピットは斜面または裾に近いところにある。すべてⅤ層中から掘りこまれている。深さは約1.0～1.6ｍ、壙底のプランは細長い台形状で、杭を打ち込んだ痕が１～３ヵ所ある（ＴＰ－５は不詳）。

出土遺物は約1,500点、頂部のⅢ層とⅤ層上部を中心に出土した縄文時代晩期の土器片（タンネトウＬ式ほか）が多くを占める。Ⅲ層の中位以下では頂部から南斜面にかけて、中期の土器片（柏木川式・萩ヶ岡式ほか）が出土した。石器は石鏃・石斧・たたき石などがある。

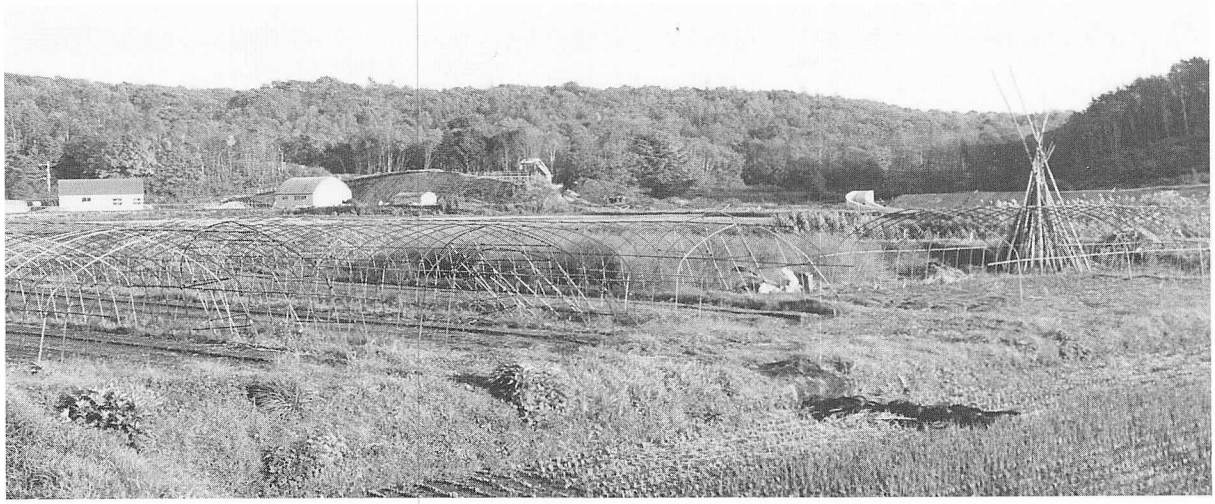
昨年まで住宅地として利用されていた南裾以南の平地でもトレンチ調査を行ったが、削平されたところが多く、Ⅲ・Ⅴ層が残存する部分にも遺構・遺物はなかった。

焼土の位置および遺物の分布状況からみて、本遺跡の主体部は縄文時代中期・晩期とも、土取りされた尾根北半部にあったものと推定される。

遺路の位置（○印　１：50,000）



遺構位置図



遺跡付近の景観（中央左寄りの低い丘が調査区）

△　調査状況

▷　Ｔピット（TP－４）

3　研修・研究会等

(1)　研修・研究会参加

＊奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修

専門研修「遺跡探査課程」　田口　尚　5月24日～6月2日

特別研修「製鉄遺跡調査課程」　鈴木　信　10月25日～28日

＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（宇都宮市）　10月6・7日

参加者　中村貴志・小笠原学・宗像公司

＊国立歴史民俗博物館特定研究

「アイヌ文化の成立過程について」　特定研究員　越田賢一郎・三浦正人

＊北海道開拓記念館テーマ展関連講座　4月9日

講　師　越田賢一郎・田口　尚　「発掘された北の歴史

― 北海道埋蔵文化財センター15年の歩みと調査成果 ―」

＊埋蔵文化財写真技術研究会（奈良市）　7月1・2日

参加者　越田雅司

＊豊浦町高齢者大学　7月22日

講　師　西田　茂　「郷土の文化遺産 ― 豊浦町の遺跡」

＊第21回日本エム・テクノロジー学会（筑波大学）　8月6・7日

参加者　皆川洋一

＊平取町立二風谷アイヌ文化博物館特別展セミナー　10月16日

講　師　越田賢一郎　「鉄鍋からみた遺跡の年代観」

三浦正人　「沙流川流域における金属製品出土の状況」

＊南北海道考古学情報交換会（乙部町）　12月3・4日

発表者　越田賢一郎　「上磯町　茂別遺跡」

高橋和樹　「函館市　中野B遺跡」

愛場和人　「七飯町　大中山13遺跡」

参加者　佐藤和雄・佐川俊一・鈴木　信・村田　大・藤原秀樹

末光正卓・宗像公司・藤井　浩

＊北海道立北方民族博物館フォーラム『アイヌ文化の成立を考える』　12月8日

発表者　田中哲郎　「チャシとその墓 ― 二風谷遺跡の例を中心にして ―」

参加者　越田賢一郎・田口　尚・鈴木　信

＊北海道考古学会発掘調査報告会（札幌市）　12月10日

発表者　鈴木　信　「オサツ2遺跡」

＊シンポジュウム『北海道における縄文時代のはじまりに関する土器の諸様相』（札幌市）
12月17・18日

発表者　遠藤香澄　「函館空港中野 A 遺跡の押型文・貝殻文系土器群」
三浦正人　「清水町上清水 2 遺跡の沈線文・条痕文土器群」
熊谷仁志　「函館空港中野 B 遺跡の沈線文・条痕文土器群」
田中哲郎　「芦別市滝里 4 遺跡出土の沈線文・条痕文土器群」

＊道北地区考古学懇話会（芦別市）　1 月28・29日

発表者　田中哲郎　「芦別市滝里 4 遺跡の発掘調査」
参加者　遠藤香澄・澤田　健

(2) 展覧会等協力

＊北海道開拓記念館　第100回テーマ展　4 月 2 日～20日
「掘り出された北の歴史 ― 平成 5 年度㈶北海道埋蔵文化財センターの発掘調査から ―」

＊平取町立二風谷アイヌ文化博物館　第 2 回特別展　10月 1 日～31日
「沙流川流域の遺跡群」

＊第19回道民ホール文化財展　主催　北海道教育委員会　2 月20日～24日
「土器の移り変わり」

(3) 部内研修・研究会

＊発掘調査報告会　11月25日

＊研修等報告会　1 月26日

発表者　田口　尚　「遺跡探査」
発表者　越田雅司　「美沢15遺跡における地中レーダー探査結果」

4　刊行報告書等

平成５年度刊行

第85集　**『滝里遺跡群Ⅳ　滝里10遺跡・滝里11遺跡・滝里31遺跡』**
石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第86集　**『千歳市　ユカンボシＣ２遺跡』**
長都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第87集　**『七飯町　鳴川右岸遺跡』**
一般国道５号函館新道(自動車専用道路)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第88集　**『豊浦町　高岡１遺跡』**
北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書

第89集　**『美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ　美々８遺跡・美沢３遺跡』**
新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第90集　**『千歳市　オサツトー１遺跡・キウス７遺跡』**
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

概　報　**『千歳市　キウス４遺跡』**
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財事前発掘調査概報

平成６年度刊行もしくは刊行予定

記念誌　**『遺跡が語る北海道の歴史』**　５月23日発行
㈶北海道埋蔵文化財センター15周年記念誌

第91集　**『豊浦町　高岡１遺跡(2)』**
北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書

第92集　**『千歳市　キウス５遺跡・キウス７遺跡(2)・ケネフチ８遺跡』**
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第93集　**『七飯町　大中山13遺跡(2)』**
一般国道５号函館新道(自動車専用道路)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第94集　**『滝里遺跡群Ⅴ　滝里４遺跡(1)』**
石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第95集　**『美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ　美々８遺跡』**
新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

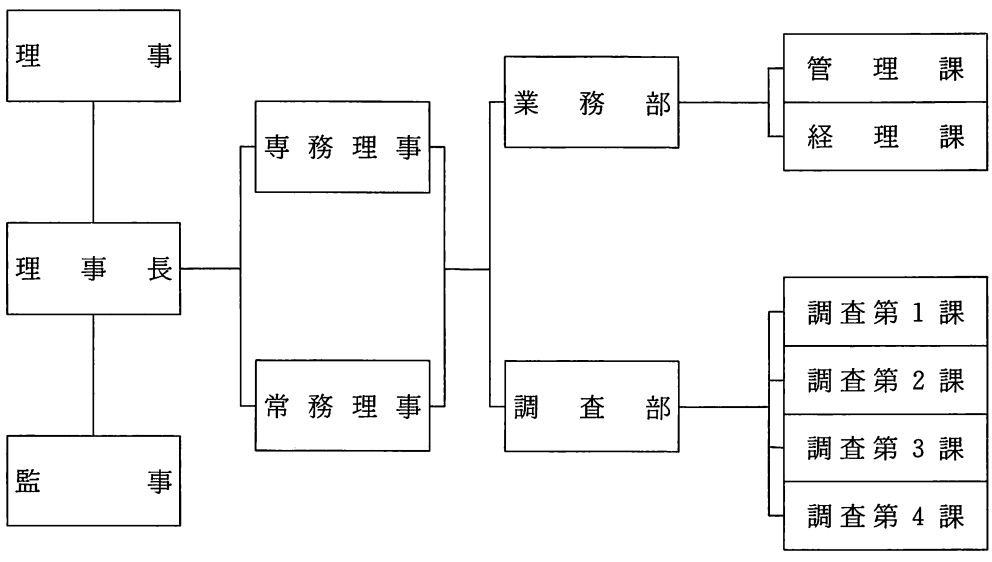
第96集　**『ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅲ　美沢15遺跡』**
新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第97集　**『千歳市　オサツ２遺跡・オサツ14遺跡』**
都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

5　機構・組織

役　員

理事長	阿部　茂（5月31日退任）	北海道教育委員会教育長
	伊藤一夫（6月1日就任）	
専務理事	永田春男（5月31日退任）	
	佐藤哲人（6月1日就任）	
常務理事	中村福彦	北海道教育庁生涯学習部文化課主幹
理　事	石林　清	北海道文化財保護協会副会長
〃	永井秀夫	北海学園大学教授
〃	藤本英夫	北海道文化財保護審議会委員
〃	北川芳男	静修女子大学教授
〃	岡田宏明	北海道大学教授
〃	南原一晴	北海道企画振興部長
〃	桝澤哲夫（5月31日退任）	北海道教育庁企画管理部長
〃	安田　經（6月1日就任）	〃
〃	小杉捷七	北海道教育庁生涯学習部長
監　事	安達　整	北海道生涯学習審議会副会長
〃	柚原義親（5月31日退任）	北海道副出納長兼出納局長
〃	岡崎悠吾（6月1日就任）	〃



職　員

業務部

業務部長　中野　眞吾°

管理課長　井島　紀雄°
主任　葛西　宏昭
〃　磯田　千秋
主事　中村　貴志
嘱託　穂坂惣次郎（5月31日退職）
〃　富樫　良雄（6月1日採用）
〃　藤田　忠雄

経理課長　斎藤　邦雄°
主任　菅野　聡
〃　吉田貴和子
主事　小笠原　学
嘱託　重平　洵（5月31日退職）
〃　柿島　軍平（10月1日採用）

調査部

調査部長　森田　知忠°

調査第1課長　鬼柳　彰
主任　西田　茂
〃　花岡　正光
〃　立川トマス
〃　皆川　洋一
〃　藤本　昌子（図書担当）
文化財保護主事　西脇対名夫°
〃　藤原　秀樹
〃　中山　昭大
〃　末光　正卓

調査第2課長　越田賢一郎°
主任　遠藤　香澄
〃　工藤　研治°
〃　田中　哲郎°
文化財保護主事　澤田　健
〃　愛場　和人

調査第3課長　千葉　英一°
主任　佐藤　和雄
〃　三浦　正人
〃　田口　尚
〃　鈴木　信
〃　鎌田　望
文化財保護主事　越田　雅司
〃　藤井　浩

調査第4課長　高橋　和樹°
主任　和泉田　毅
〃　佐川　俊一
〃　谷島　由貴
〃　熊谷　仁志
〃　森　秀之°
文化財保護主事　村田　大
〃　倉橋　直孝
〃　宗像　公司

○は北海道教育庁文化課からの派遣職員

調 査 年 報 7

平成6年度

平成7年1月31日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)561－3131

印　　刷　富士プリント株式会社
〒064 札幌市中央区南16条西9丁目
☎(011)531－4711